

第 3 章

史跡泉坂下遺跡の概要

第 1 節 弥生時代の再葬墓遺跡

泉坂下遺跡は、弥生時代に東日本で特徴的にみられる再葬墓が多く営まれた遺跡である。

これまで弥生時代研究といえば、西日本を中心とする稲作や小国の乱立、青銅器祭祀等が対象となってきたため、東日本における生業や墓制については未知なことが多い。その中で、泉坂下遺跡は東日本の弥生時代の墓制の解明、ひいては当時の社会や文化の解明に繋げうる資料といえる。

再葬墓とは、遺体を一旦土に埋めるなどして骨化した後に取り上げ、その骨を壺等に納めて改めて埋納した墓のことである。再葬墓は、時期と地域が限定される墓制であり、時期的には縄文時代晩期から弥生時代中期にかけて、地域的には愛知県以東、岩手県にまで分布し、特に茨城県を含む北関東 3 県と福島県に多くみられる。東日本の弥生時代前期から中期前葉を中心とした時期での特徴的な墓制といえる。

ただし、再葬墓遺跡は、その可能性のある遺跡を含めても発見数は全国で約 140 遺跡であり、多くの遺跡が耕作等の攪乱により遺存状態が悪く、再葬墓の研究は十分に進展してこなかった。

こうした状況の中で、泉坂下遺跡においては、1 基当たりの埋納土器の数が 1 点から 15 点と様々であること、同時期の一次葬に使われた可能性がある土坑墓が見つかること、縄文時代晩期の集落と同じ場所に形成されていることなど、再葬墓としての特徴及び全体像がはっきりと確認できた。

もうひとつは、人面付壺形土器の出土が特筆される。再葬墓遺構に埋納される人面付壺形土器は、当時の人々の精神文化を強く反映していると考えられ、弥生文化研究の重要な資料である。しかも、人面付壺形土器は、再葬墓遺構に関係する遺物として特徴的な遺物とされているが、出土例が極めて少なく、これまで全国 14 遺跡からの 17 個体の出土例しかない。

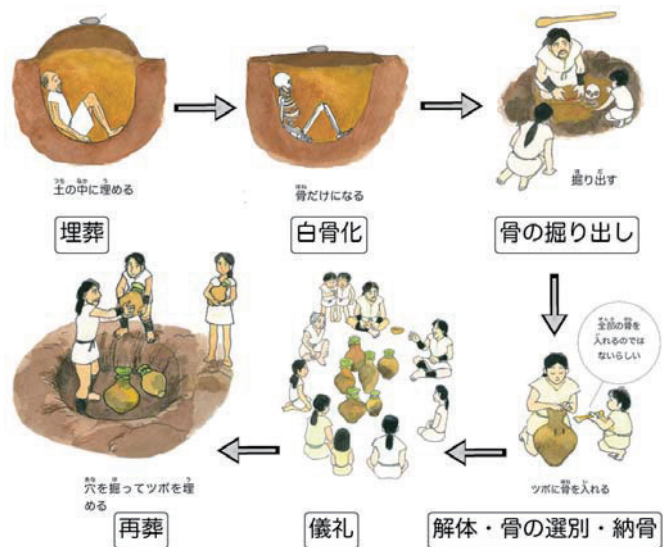


図 3-1 再葬のプロセス (『いずみのツボ』常陸大宮市編 2017 12-13 頁より作図) 画: さかいひろこ

第2節 史跡指定

史跡泉坂下遺跡の指定概要、指定範囲は、以下の通りである。また、指定後の令和2年3月に史跡内の土地は全て公有地化し、農地転用の手続を行った。

表 3-1 史跡泉坂下遺跡の指定概要

項 目	内 容
名 称	泉坂下遺跡
種 別	史跡
指定年月日	史跡指定 平成29年（2017）10月13日（文部科学省告示第137号）
指定面積	6, 148. 40㎡
所在地	茨城県常陸大宮市泉坂下894番 外22筆
指定基準	一、貝塚、集落跡、古墳、その他この類の遺跡
管理団体	常陸大宮市（管理団体指定は平成30年（2018）2月19日・文化庁告示第24号）

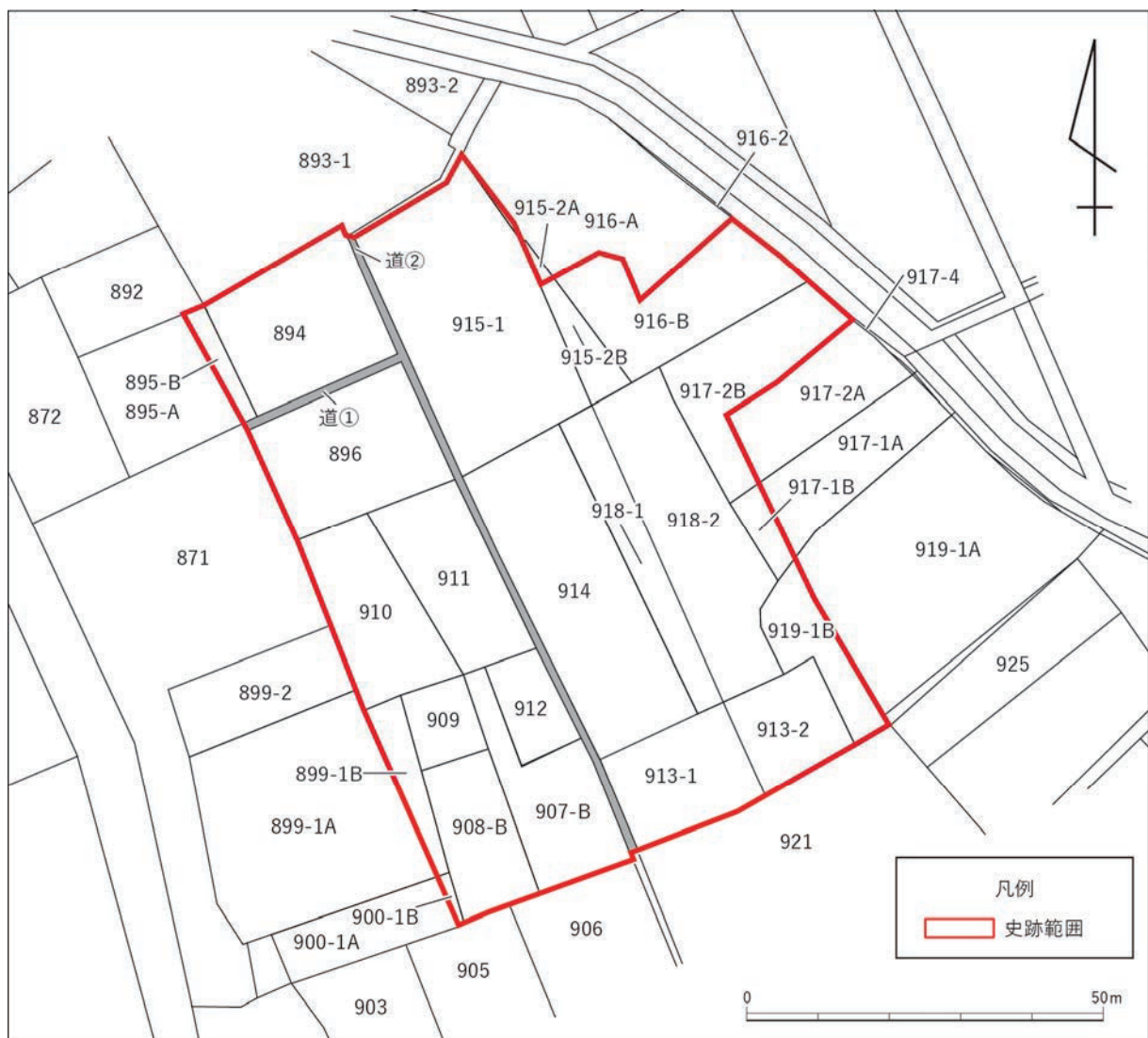


図 3-2 史跡泉坂下遺跡指定範囲図

(1) 指定説明

泉坂下遺跡は、市域の東端付近を流れる久慈川とその支流玉川との合流点から北西に約三キロメートル、那珂台地から東に下った久慈川右岸の低位段丘上に立地している。

遺跡は、平成十八年の鈴木素行による学術目的調査によって確認された再葬墓遺跡である。再葬墓とは、土葬や風葬などによっていったん遺骸を処理し遺骨を土器等に入れて再び埋葬する葬法で、主に東日本の弥生時代中期中葉までに認められる墓制である。

このときの調査では七基の再葬墓を検出し、最も注目されたのは、一号墓坑から検出された四個体の土器のうちの一点が非常に大きな人面付壺形土器だったことである。

常陸大宮市教育委員会では、この遺跡の重要性に鑑み、平成二十四年度から遺跡の範囲、内容を確認するための発掘調査を実施してきた。その結果、再葬墓三〇基を確認し、一基あたりの埋納土器は一個のものが七基、複数のものが二三基で、最も多いのは一五個に達し、確認できている土器は一五三個に及ぶ。このほか、一六基の土坑を検出した。

墓域は大きく東西の二群に分かれていた。東群では二四基の再葬墓がおおむね、長辺二〇メートル、短辺一五メートルの範囲に収まり、埋納土器が一個だけのものは四基、複数のものが二〇基で、再葬墓どうし近接して設けられ密集している。西群は、長辺二〇メートル、短辺一〇メートルの範囲に埋納土器が一個だけのものが三基、複数のものが三基の合計六基で構成され、分布密度は低い。これらはいずれも弥生時代中期前葉に属しているが、東西での分布の密集度に違いがあることが明らかとなった。

また、一六基の土坑については、一次葬のためのものという観点から調査が進められた。土坑内から人骨の出土はなく、土壌のリン酸・カルシウム等の分析を行ったものの、人骨の存在を示す結果は得られなかったが、一次葬のためのものである可能性が考えられている。

出土した土器のなかで、注目されるのは人面付壺形土器である。器高七七・七センチメートル、口径一四・〇センチメートルで、この種の土器のなかでは最大であり、口縁部から頸部にかけて、人面の造作は著しく立体的で、特に顎の部分を大きく張り出している点を特徴とする優品である。赤色顔料が右眼下や右顎に部分的に認められることから、人面部は赤彩されていたと考えられる。

出土した土器一五三点のうち壺が一四五点である。取り上げた五二点のうち、人面付壺形土器を含めて三二点の器面の内外に炭化物の付着があり、煮沸痕が認められる。このほか、副葬品として、一基から滑石製の玉が六^{下線}点出土している。

なお、他の再葬墓遺跡でも認められるものと同様に、当遺跡でも縄文時代後・晩期の遺物が非常に多く出土しており、特に晩期中葉の遺物が密である。

これまでの再葬墓は偶発的に発見されることや後世の削平を受けて遺存状況が良好でない例がみられるなか、泉坂下遺跡は、弥生時代中期前葉の再葬墓遺跡として、遺構の残存状況は極めて良好で、墓域の全貌が判明した事例として貴重であり、現地に未調査の土器が多数遺存している。しかも、東西の二群に分かれ、再葬墓の密集度に違いがあることは、再葬墓が営まれた原理を知る事例を提供し、さらには、人面付壺形土器を発掘調査し、その出土状況が分かった。このように、本遺跡は弥生時代中期の東日本で特徴的に認められる再葬墓遺跡の様相を知ることができるという点で重要である。よって史跡に指定し、保護を図ろうとするものである。

(『月刊文化財』平成29年(2017)9月号(648号)。下線追記)

※下線で示した「六^{下線}点」について、正しい調査結果は「五^{下線}点」である。

(2) 史跡の価値

史跡泉坂下遺跡保存活用計画において、史跡の価値を整理し、3つに分けて記載している。

ひとつは、史跡の本質的価値に直接的に関わる再葬墓遺跡そのものである。そのほかに、縄文時代晩期の遺構を「本質的価値に付随する要素」と位置付け、史跡から見渡せる良好な自然環境や歴史的景観と、現在に至る様々な活動痕跡も、史跡の価値の一部を成すものとして「史跡をとりまく環境」としている。

史跡の価値
○本質的価値 ・弥生時代東日本で特徴的に認められる再葬墓の、全容を知ることができる 学術調査により発掘され、遺存状態が良好で墓域の全貌が判明した再葬墓遺跡として稀有な例であり、様相が不明な点が多い弥生時代前・中期の東日本の研究を進める上で極めて重要な価値を有する。 ・遺存状態が極めて良好な人面付壺形土器をはじめとする出土遺物 再葬墓 30 基から、この種での土器では最大となる人面付壺形土器を含む、在地及び周辺地域に由来する多様な壺形土器が約 100 個体以上確認されており、うち出土品 61 点が重要文化財に指定されている。 ○本質的価値に付随する要素 ・再葬墓の前段階に形成された縄文時代晩期の遺構 縄文時代晩期の住居及び石棒製作遺跡の遺構・遺物。再葬墓の時代へと続くものであり、他の再葬墓遺跡においても、この時代の遺構・遺物が合わせて出土することから重要視する。 ○史跡をとりまく環境 ・弥生時代の環境・景観が残る。 久慈川沿いの低位段丘上にある史跡からは、久慈川沖積地に広がる水田や自然堤防上に形成された集落が見渡せる。湧水が豊富で動植物も豊かで、歴史的景観や自然環境が良く残る。 ・再葬墓以後も、継続的に営まれた人々の活動痕跡 平安時代には集落が営まれ、中～近世には土坑墓が造営され、現代の集落につながる人々の活動が継続的に営まれてきた。

第3節 発掘調査の成果

泉坂下遺跡において発掘調査はこれまで全7回行われ、縄文から近世にかけて幅広い時代の遺構・遺物が確認されている。その中で大きな割合を占めるのは、縄文時代晩期の竪穴住居跡、弥生時代の再葬墓、平安時代の竪穴住居跡、中近世の墓壇である。弥生時代の再葬墓を中心に、時代ごとに下記のとおりまとめる。

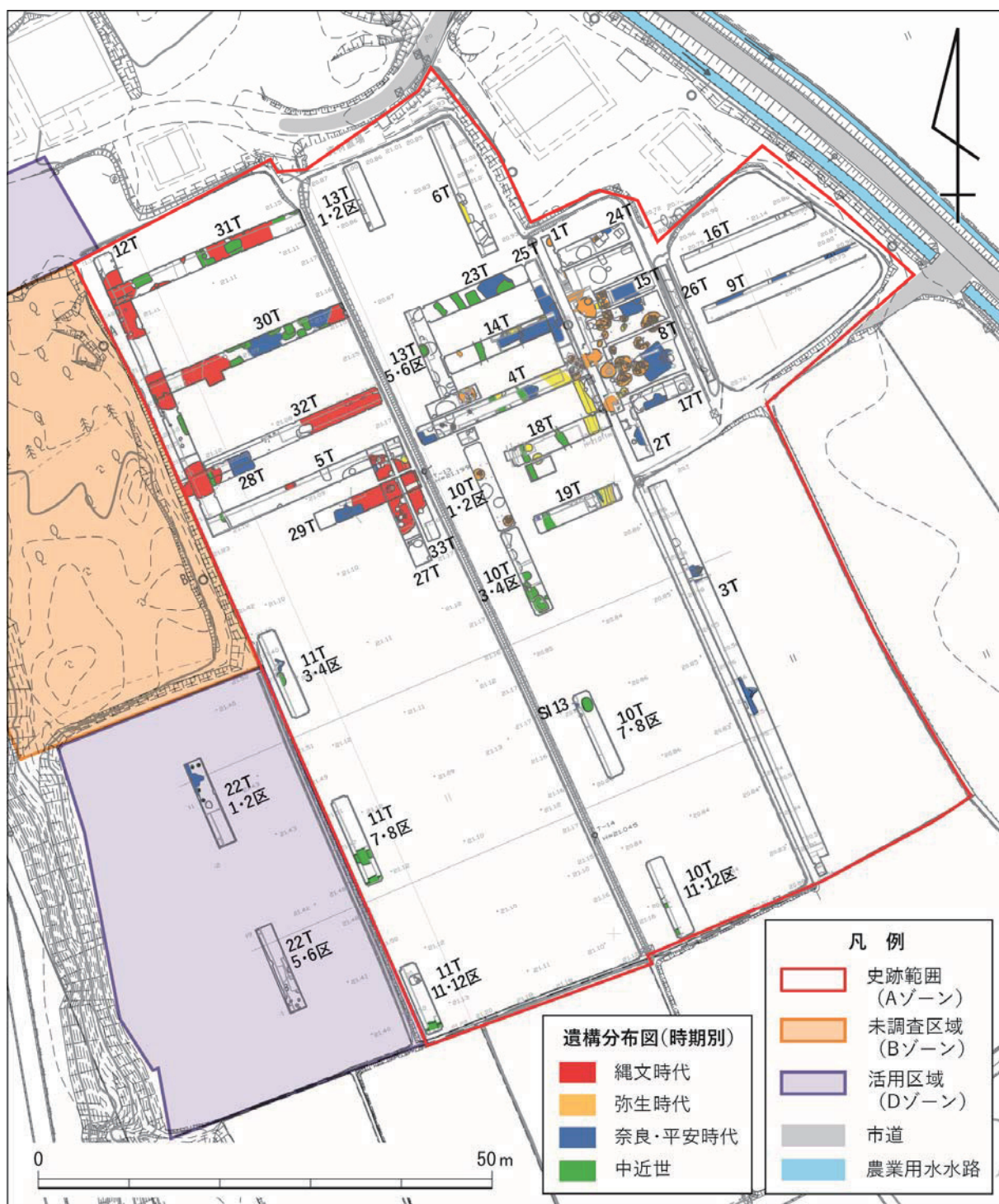


図 3-3 遺構分布図

1. 基本土層及び遺構高さ

泉坂下遺跡の土層分類は、Ⅰ層（水田耕作の土）・Ⅱ層（遺構検出層）・Ⅲ層（地山）に大別される。泉坂下遺跡において遺構が確認された土層は、Ⅱ層である。現状高と遺構確認面の比高差は、概ね 20～40 cm である。

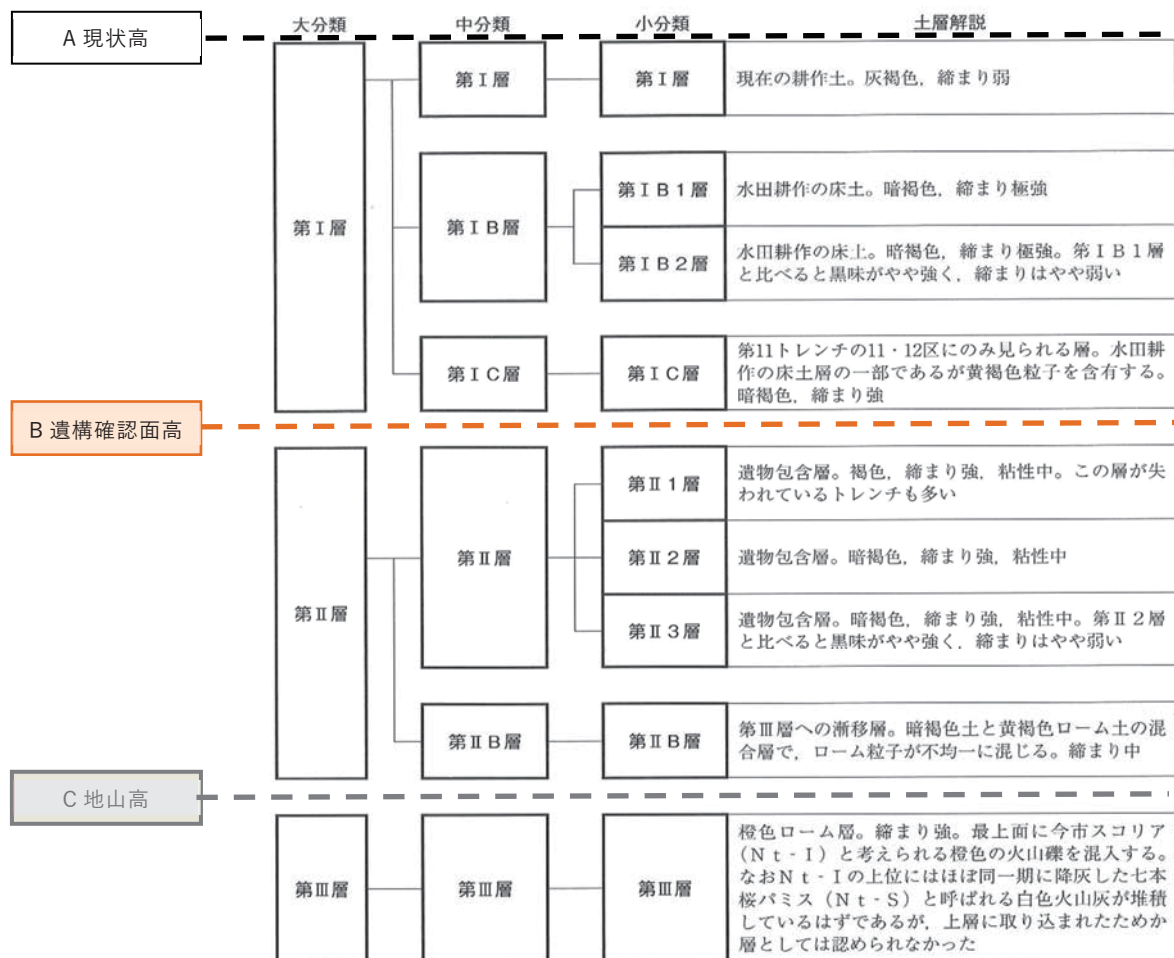


図 3-4 基本土層分類及び土層解説 「泉坂下遺跡Ⅴ」 P. 42 より引用

2. 弥生時代の再葬墓

確認調査の結果、弥生時代の土坑は 47 基確認された。このうち、再葬墓と呼べるものは 30 基である。再葬墓 1 基当たりの埋納土器の数は 1 点から 15 点とばらつきがあり、蓋等の骨蔵器以外の用途の土器も含めると、確認されているすべての再葬墓内の土器は計 153 点にのぼる。

弥生時代の再葬墓は、東西約 30m の範囲内に集中しており、多数の土器が埋納される大型の再葬墓が密集している地域（東群）と、単数土器再葬墓と中規模の再葬墓がまばらに分布している地域（西群）が確認できた（図 3-5）。30 基の再葬墓のうち、24 基は東群に属し、6 基は西群に属していて、埋納される土器から、東群の中でも再葬墓の時期差が認められ、さらに西群の方がより新しい時期の所産と考えられている。また、残りの 17 基の土坑は、再葬墓と同時代と推測される遺構であり、一次葬墓または土坑墓である可能性が指摘されている。

平成 18 年の学術調査では、再葬墓の確認後、そのまま埋め戻すと耕作により破壊されることが確実な状況であったことから、確認できた再葬墓 7 基はすべて掘り下げ、遺物は取り上げた。その後は、遺構への影響を最小限にとどめる方針としたことにより、原則として遺構の掘り込みはしていない。その例外として、第 3 次調査の際に第 26 号土坑をサンプルとして掘り込んで調査した。



第 1 号墓墳 (SK1) 出土状況



第 2 号墓墳 (SK2) 出土状況



第 3 号墓墳 (SK3) 出土状況



第 4・5 号墓墳 (SK4・5) 出土状況



第 6 号墓墳 (SK6) 出土状況



第 26 号土坑 (SK26) 出土状況

表 3-2 弥生時代 土坑一覧表 ※  は再葬墓を示す

No.	遺構番号	調査報告書の掲載	確認したトレンチ	種別	属群	遺構規模 (cm)		再葬墓に伴う埋納土器		出土遺物の取扱い	備考
						長軸	短軸	点数	所見		
1	S K 1	平成18年	1 T	複数土器再葬墓	東群	195	145	人面付壺形土器 1、壺形土器 3		全て取り上げ、 重文指定 。	人面付壺形土器出土。 土器 2 ～ 4 年代測定実施。
2	S K 2	平成18年	1 T	複数土器再葬墓	東群	227	187	壺形土器 15	土器 15 は埋納のためではない可能性が高い。	全て取り上げ、土器 1 ～ 14 は 重文指定 。	土器 15 点は最多。 土器 1 ・ 2 ・ 4 ・ 5 ・ 8 ～ 11 年代測定実施。
3	S K 3	平成18年	1 T	複数土器再葬墓	東群	147	125	壺形土器 8		全て取り上げ、 重文指定 。	土器 1 ～ 7 年代測定実施。
4	S K 4	平成18年	1 T	複数土器再葬墓	東群	150	150	壺形土器 8		全て取り上げ、 重文指定 。	土器 1 ～ 6 年代測定実施。
5	S K 5	平成18年 第 1 次 第 3 次 第 4 次	1 ・ 4 ・ 25 T	複数土器再葬墓	東群	185	170	壺形土器 13		土器 1 ～ 6 は取り上げ、 重文指定 。 土器 7 ～ 13 は 埋没保存 。	土器 1 ～ 3 ・ 5 年代測定実施。
6	S K 6	平成18年	1 T	複数土器再葬墓	東群	120	80	壺形土器 3		全て取り上げ、 重文指定 。	土器 1 ～ 3 年代測定実施
7	S K 7	平成18年	1 T		東群	72	72				
8	S K 8	平成18年	1 T	一次葬墓か	東群	80	50				
9	S K 9	平成18年	1 T	一次葬墓か	東群	79	18				
10	S K 19	第 1 次 第 4 次	4 T	単数土器再葬墓	東群	48	35	壺形土器 1		埋没保存	
11	S K 20	第 1 次 第 4 次	4 T	単数土器再葬墓	東群	63	60	壺形土器 1		埋没保存	
12	S K 21	第 1 次 第 4 次	4 T	単数土器再葬墓	東群	54	52	壺形土器 1		埋没保存	
13	S K 23	第 1 次 第 3 次	8 T ・ C 地区	複数土器再葬墓	東群	230	202	壺形土器 15		全て 埋没保存	土器 15 点は最多 No. 2 年代測定実施。
14	S K 24	第 1 次 第 3 次	8 T	複数土器再葬墓	東群	133	99	壺形土器 5	土器 2 ・ 5 は蓋として使われたか	全て 埋没保存	
15	S K 25	第 1 次 第 3 次	8 T	複数土器再葬墓	東群	92	63	壺形土器 2		全て 埋没保存	
16	S K 26	第 1 次 第 3 次	8 T ・ D 地区	複数土器再葬墓	東群	190	180	壺形土器 8		全て取り上げ、 重文指定 。	埋納状況等の三次元計測実施。 花粉分析、微細物分析、土壌理化学分析実施。 土器 2 ・ 6 ・ 7 ・ 8 ・ 10 年代測定実施。 土器 10 圧痕レプリカ分析実施。
17	S K 30	第 1 次 第 3 次	8 T	単数土器再葬墓	東群	77	58	壺形土器 1		埋没保存	
18	S K 42	第 1 次	4 T		西群	-	-				
19	S K 59	第 2 次 第 3 次	15 T	単数土器再葬墓	東群	55	37	壺形土器 1		埋没保存	S X 2 と同一
20	S K 60	第 2 次 第 3 次	15 T	複数土器再葬墓	東群	-	120	壺形土器 4		全て 埋没保存	
21	S K 61	第 2 次 第 3 次	15 T	複数土器再葬墓	東群	-	-	壺形土器 2、不明 1		全て 埋没保存	
22	S K 67	第 2 次	14 T		西群	66	44				当初は再葬墓の可能性を考えられた No. 6 ・ 9 年代測定実施。
23	S K 81	第 2 次	18 T		西群	111	111				当初は再葬墓の可能性を考えられた
24	S K 83	第 2 次	18 T		西群	85	85				当初は再葬墓の可能性を考えられた
25	S K 84	第 2 次	15 T		東群	-	-				
26	S K 108	第 3 次	10 T	複数土器再葬墓	西群	120	120	壺形土器 3		全て 埋没保存	
27	S K 109	第 3 次	10 T		西群	125	115				
28	S K 110	第 3 次	10 T	複数土器再葬墓	西群	110	110	壺形土器 4	土器 4 は土器 3 の蓋として使用	全て 埋没保存	No. 10 年代測定実施。
29	S K 113	第 3 次	C 地区	複数土器再葬墓	東群	-	90	壺形土器 2		全て 埋没保存	
30	S K 114	第 3 次	C 地区	複数土器再葬墓	東群	130	130	壺形土器 6		全て 埋没保存	
31	S K 115	第 3 次	C 地区	複数土器再葬墓	東群	175	130	壺形土器 4		全て 埋没保存	
32	S K 116	第 3 次	C 地区	単数土器再葬墓	東群	80	80	壺形土器 1		埋没保存	
33	S K 117	第 3 次	D 地区	複数土器再葬墓	東群	192	153	壺形土器 13		全て 埋没保存	
34	S K 118	第 3 次	D 地区	複数土器再葬墓	東群	180	150	壺形土器 5		全て 埋没保存	S X 3 と同一

No.	遺構 番号	調査報告 書の掲載	確認した トレンチ	種別	属群	遺構規模 (cm)		再葬墓に伴う埋納土器		出土遺物の取扱い	備考
						長軸	短軸	点数	所見		
35	S K 119	第 3 次	D 地区		東群	-	-				
36	S K 136	第 3 次	24 T	単数土器再葬墓	東群	90	90	壺形土器 1		埋没保存	
37	S K 152	第 3 次 第 4 次	4・25 T	複数土器再葬墓	東群	86	70	壺形土器 2		全て埋没保存	
38	S K 153	第 3 次 第 4 次	4・25 T	複数土器再葬墓	東群	197	140	壺形土器 8、蓋 1		土器 9 (蓋) は取り 上げ、土器 1～8 は 埋没保存。	土器 9 は動いてしまったため、 やむを得ず取り上げたもの
39	S K 157	第 3 次	D 地区		東群	-	-				
40	S K 158	第 3 次	C 地区		東群	80	53				
41	S K 160	第 4 次	4 T			-	-				
42	S K 164	第 4 次	4 T	複数土器再葬墓	西群	186	160	壺形土器 5、浅鉢 1		全て埋没保存	
43	S K 165	第 4 次	14 T		東群	-	-				
44	S K 176	第 4 次	27 T			57	48				
45	S K 180	第 4 次	27 T			53	50				
46	S X 1	平成18年	1 T	複数土器再葬墓 か	東群	-	-	壺形土器 2、変形土 器 2		全て取り上げ、重文 指定。	変形土器が出土、土器への損傷 が大きいなど、不明点が残る。土 器 2 年代測定実施。
47	S K 220	第 6 次	33 T	墓壇か		84	75				

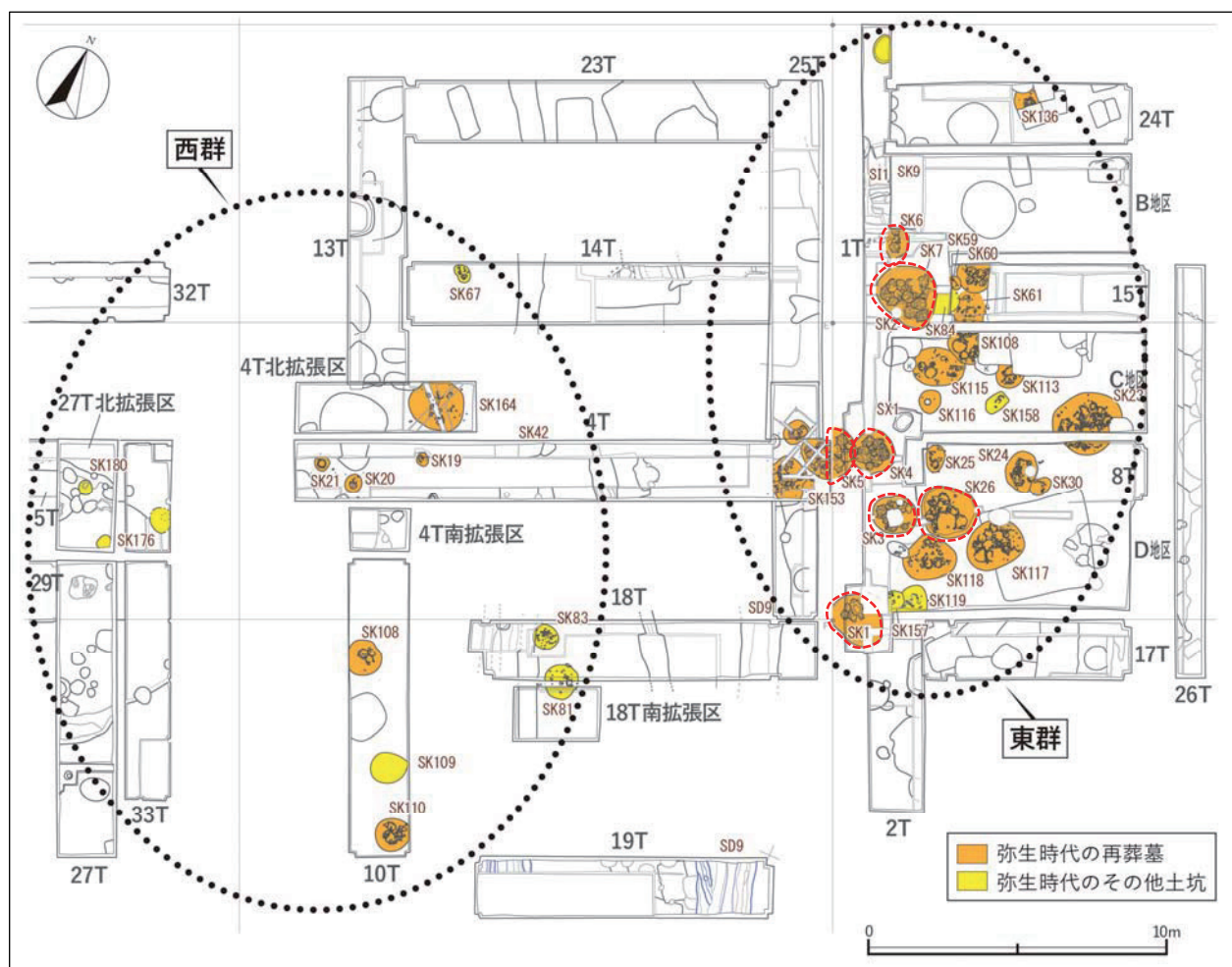


図 3-5 弥生時代再葬墓等遺構分布図
※赤破線で囲んだ遺構は、遺構を掘り下げて調査した再葬墓

3. 縄文時代晩期の竪穴住居跡

晩期前葉から中葉にかけての遺物は特に図3-5で示した区域から多く出土している。縄文時代晩期の竪穴住居跡は、確認調査の結果、13軒確認された。

特に、第26号竪穴住居跡は、トレンチ部分を遺構底面まで掘り込み、付近に追加のトレンチを入れて調査した。その結果、平面形が概ね円形となることを確認し、また、床面直上から晩期初頭安行3a式の大型破片が出土したため、この時期の所産と考えられる。さらに、覆土上層には晩期中葉の大洞C1～C2式のものが多くみられ、埋没過程を確認することができた。

また、泉坂下遺跡は石棒製作遺跡としての性格も重要視されており、これらの住居跡からは石棒類の完成品・未成品や、石棒製作にかかわると考えられる砥石等がそれぞれ出土している。

なお、晩期後葉から弥生時代前期にかけて遺物数は減少するものの、弥生時代再葬墓の営まれる中期前半まで継続して確認されている。

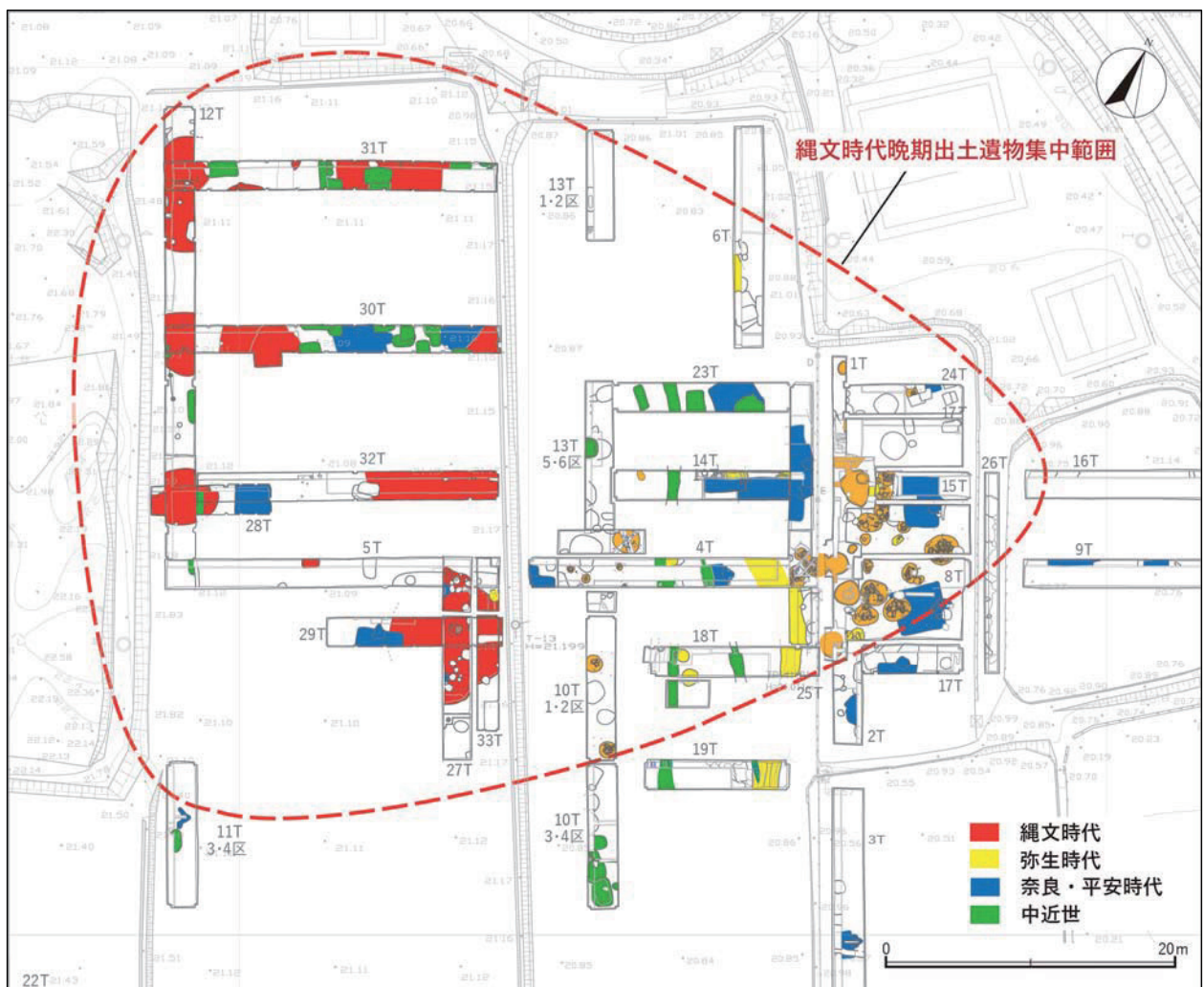


図3-6 縄文時代遺構分布拡大図

表 3-3 縄文時代晩期竪穴住居跡一覧表

No.	遺構番号	トレンチ	調査年次	遺構の規模	土器の種類（点数）	備 考
1	S I 9	12 T	第 2 次調査で確認。	平面は径 310 cm のほぼ円形と考えられる。 壁高 12 cm。 外傾して立ち上がる。	土器等 259 点、石器等 6 点。 縄文晩期前葉から中葉のものが含まれる。	第 94 号土坑に切られている。 出土遺物及び形状から、縄文時代晩期の竪穴住居跡と考えられる。
2	S I 10	12 T	第 2 次調査で確認。	平面は径 504 cm のほぼ円形と考えられる。 壁高は 10 cm で、外傾して立ち上がる。	土器等 91 点、石器等 5 点。 縄文晩期前葉の土器が含まれる。	第 54・57・9 号土坑に切られている。 出土遺物及び形状から、縄文時代晩期の竪穴住居跡と考えられる。
3	S I 11	12 T	第 2 次調査で確認。	平面は径 420 cm のほぼ円形と考えられる。壁高は外傾して立ち上がる。	縄文土器 1 点。 縄文晩期前葉の土器である。	第 1 号掘立柱建物跡に切られている。 出土遺物及び形状から、縄文時代晩期の竪穴住居跡と考えられる。
4	S I 12	12・28 T	第 2 次調査で確認。 第 5 次調査で調査。	平面は径 380 cm のほぼ円形と考えられる。壁は外傾して立ち上がる。	【第 2 次調査】土器等 91 点、石器等 5 点。 【第 5 次調査】土器片・土製品 490 点、石器・石製品・剥片等 69 点、骨片 3 点、合計 562 点。	【第 2 次調査】出土遺物及び形状から、縄文時代晩期の竪穴住居跡と考えられる。 【第 5 次調査】不整円で南北は 3.80m。西区では壁の立ち上がりが見えられず、SK198 の下層に本跡の覆土が連続しているのが確認され、トレンチ西端より外側で立ち上がると考えられる。現状での規模は 4.38m。 遺構の形状、重複関係、土器の年代観から縄文時代晩期中葉の住居跡と考えられる。
5	S I 26	27・29・33 T	第 4・5・6 次調査で調査。	東西の規模 8.46m 以上。 おおよその直径は床面で 8.5m ほど。	【第 4 次調査】土器等 3、442 点、石器等 841 点、骨製品等 349 点、炭化物 3 点。 【第 5 次調査】土器片 558 点、石器・石製品・剥片等 100 点、骨片 18 点、合計 676 点。多くはサブトレンチからの出土。 【第 6 次調査】出土した遺物は包含層に帰属するもので、住居跡に帰属することが確実な遺物は検出されていない。	【第 4 次調査】概ね円形になると考えられ、確認できる最大幅は 9.60m。円の中心はトレンチ西側となるため、径は 10m 前後と考えられる。確認できる深さは 52 cm で壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。第 4 号掘立柱建物跡、第 176・180～182 号土坑に切られる。炉は中央やや東寄りに確認。東半部が炉本体と考えられる。 出土遺物から、縄文時代晩期前葉の竪穴住居跡と考えられる。 【第 5 次調査】29 トレ。西壁がサブトレンチ内で立ち上がることを確認。東側は農業用水パイプが埋設されているためにトレンチ延長できず、外形線はトレンチ内ではとらえることはできなかった。東西の規模が 8.46m 以上と判明。 【第 6 次調査】33 トレ。第 27 トレで検出された炉跡が中央に位置したことがほぼ確実となり、住居跡のおおよその直径は床面で 8.5m ほどと推定。
6	S I 30	30 T	第 5 次調査で確認。	測定不可	土器片・土製品等 130 点、石器・剥片等 13 点出土。 土器は晩期前葉のものが多く、一部後期から晩期初頭、晩期中葉のものが含まれる。 人面付土器が出土した。	晩期前葉・大洞 BC 式期の竪穴住居跡と考えられる。 SI37・SK217 を掘り込んでいる。 SK194 に掘り込まれている。
7	S I 32	30 T	第 5 次調査で確認。	測定不可	土器片 21 点、剥片等 2 点。	西部で SI31・SK204 に掘り込まれており形状・規模とも不明。現状確認できるのは南北のトレンチ幅（実寸 1.88 m）。 SI31 に掘り込まれており、SI を掘り込む SK196・202・204 にも掘り込まれている。 時期は出土した土器大型破片から縄文晩期と考えられる。
8	S I 33	31 T	第 5 次調査で確認。	8.04m 以上。	土器片・土製品等 181 点、石器・石製品・剥片等 49 点、骨片 7 点、その他 2 点、合計 239 点出土。	大規模な住居跡であることは確実だが形状と規模は不明。 時期は比較的多い出土遺物から縄文時代晩期中葉頃かと思われるが、住居に伴うような覆土下層からの出土状態ではなく時代的なばらつきがあるため確定的なことは言えない。
9	S I 34	31 T	第 5 次調査で確認。	全体形状は 4 m 前後の不整円形または不整楕円形になるものと推定される。	土器片 2 点。	南北はトレンチ幅（実寸 1.92m）いっぱいに確認されたが、さらに南北に延びる。東西は西部を SI35 に掘り込まれているが 1.36m を確認。東側外形線は弧状を呈する。 明確に住居跡と確認できたわけではないが、規模・形状から住居跡と考えた。 西部を SI35、東部を SK211 に掘り込まれている。 縄文時代の竪穴住居跡と考えられる。
10	S I 35	31 T	第 5 次調査で確認。	弧状の外形線から全体形状はほぼ円形になるものと考えられる。 現状で東西 1.68m が確認されたが径はおそらく倍以上になるものと思われる。	なし。	南北はトレンチ幅（実寸 1.92m）いっぱいに確認されたが、さらに南北に延びる。東西は東部は SI34 を掘り込む外形線が弧状に捉えられた。西に延びている。明確に住居跡と確認できたわけではないが、規模・形状から住居跡と考えた。 東部で SI34 を掘り込んでいる。 縄文時代の竪穴住居跡と考えられる。

No.	遺構番号	トレンチ	調査年次	遺構の規模	土器の種類（点数）	備 考
11	S I 36	31 T	第5次調査で確認。	確認されたのは東西 2.49 m、南北 0.38 m。	土器片 15 点、剥片 3 点、合計 18 点が出土。 縄文晩期前葉の土器が含まれる。	トレンチ南側に弧状のプランをもって確認された。確認されたのは円形プランのごく一部で、そのほとんどがトレンチ南に延びるものだと思う。明確に住居跡と確認できたわけではないが、規模・形状から住居跡と考えた。本跡の位置は第12トレンチでSI9・10が確認された位置。 SK210に掘り込まれている。 規模・形状・出土遺物から縄文時代の竪穴住居跡と考えられる。
12	S I 37	30 T	第5次調査で確認。	現状で確認できる規模は南北がトレンチ幅（実寸 1.88 m）、東西は 2.85 m。	サブトレンチでの出土が中心で量的には少ない。 土器片 33 点、剥片等 3 点出土。 一部が後期だが主体は晩期土器片。	東部を第30号竪穴住居跡に大きく掘り込まれているため全体が確認できない。SK217・218にも掘り込まれている。 晩期前葉の時期の住居跡と考えられる。後期の遺物は混入したもの。
13	S I 38	32 T	第6次調査で確認。	直径 13 m ほどか。	S I 38 と遺物包含層の区別は明確でない。	32 T サブトレンチ底面で床面を確認した。2 基の住居跡の重複の可能性もある。1 基の住居跡なら「大洞 B C 式」以前の晩期前葉と考えられる。2 基の住居跡の重複なら、新しい住居は「大洞 B C 式」以後で「大洞 C 1 式」以前ということになる。



第26号竪穴住居跡（SI26）出土状況

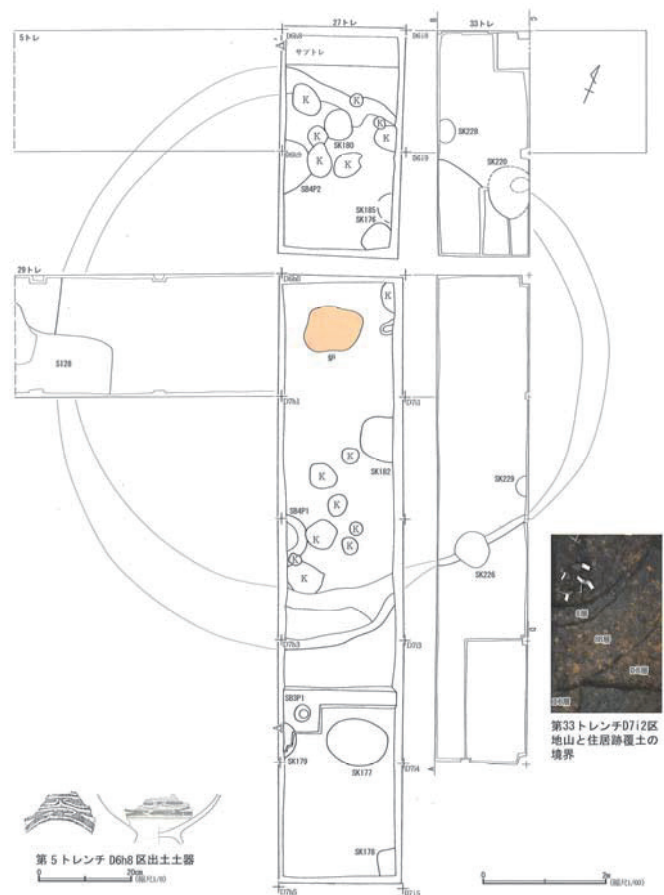


図3-7 第26号竪穴住居跡（SI26）実測図

4. その他の時代の遺構

平安時代の遺構は、竪穴住居跡 21 軒、土坑 5 基が確認されている。竪穴住居跡は調査区域の全域に広く分布しており（図 3-3）、出土遺物から、9 世紀後半頃のものとして 10 世紀後半頃のものも多く確認されている。刻書「万吉」のある耳皿や「□□大宅」の墨書土器といった特殊な遺物も確認されており、ある程度の規模の集落が存在したと考えられる。また、管状土錘も複数の竪穴住居跡から出土しており、泉坂下遺跡の東方を流れる久慈川との関連性が窺える。

中近世の遺構は、土坑 34 基と溝跡 8 条が遺跡全体に広く所在し、掘立柱建物跡や井戸跡も確認されている。土坑の多くが楕円形の中世墓壇であり、中には第 58 号土坑のように、粘土貼りや石積み、木棺等の構造が確認され、副葬品が出土しているものもある。これらの墓壇は、遺跡の中央を南北方向に走る溝跡より西側にあり、溝によって墓域が区切られていた可能性も考えられる。出土遺物から、墓壇の帰属年代は 14 世紀中頃～15 世紀と、16 世紀末～17 世紀初頭に分かれるものと考えられる。これらの墓壇や溝跡は、泉坂下遺跡西側の台地上に立地する中世城館前小屋館跡との関連性を窺わせるものである。



土師器（耳皿。内面黒色処理。体部内面に「万吉」の線刻あり）
第 1 次確認調査の第 3 トレンチ第 3 号竪穴住居跡（SI3）から出土。

5. 出土遺物の状況

（1）再葬墓から取り上げた遺物

再葬墓から取り上げた遺物は、人面付壺形土器 1 点、壺形土器 53 点、甕形土器残欠 2 点、滑石製玉 5 点である。特筆されるのは、高さ 77.7 cm の国内最大の人面付壺形土器である。この人面付壺形土器は、壺形土器の口縁部直下に斜め上を向いた人の頭部が作られ、顎は張り出して中空、目と口は沈線で囲まれ、入れ墨のような表現もある。そのほかの壺形土器も比較的依存状態が良好で、壺形土器を多数埋納する再葬墓の様子をよく示している。また、滑石製玉は壺形土器の内部から出土したもので、副葬品と考えられている。



第 26 号土坑出土遺物

これらの遺物は、再葬墓のあり方を理解するうえで良好な資料であり、人面付壺形土器を同伴するという希少な事例であることから、全点が重要文化財の指定を受けた。

表 3-4 再葬墓埋納土器一覧

遺構	出土位置	調査	点数	土器番号	器種	主軸方向	器高(cm)	口縁部	頸部	胴部	底面	備考
S K 1	1 トレ	平成 18 年・3 次	4 点	1	人面付壺	南東	77.7	14.0		38.0	12.5	残存率 95% 人面部は赤彩されていたと考えられる
				2	壺	南東	45.4	11.5		26.4	9.4	残存率 100%
				3	壺	南南東	33.9	10.2		25.0	9.0	残存率 95%
				4	壺	南南東	32.5	10.2		21.7	8.6	残存率 95%
S K 2	1 トレ	平成 18 年・3 次	15 点	1	壺	南	(47.0)	—		32.9	11.0	残存率 60%
				2	壺	東南東	43.3	11.7		32.7	11.2	残存率 90%
				3	壺	南南東	49.6	12.9		34.8	10.6	残存率 90%
				4	壺	南東	45.4	11.1		28.1	10.5	残存率 95%
				5	壺	南東	52.9	12.6		33.5	11.6	残存率 70%
				6	壺	南西	(46.8)	13.8		32.2	—	残存率 60%
				7	壺	西南西	(55.8)	17.3		40.2	—	残存率 80%
				8	壺	南南西	(44.1)	(12.7)		32.4	11.0	残存率 80%
				9	壺	南南西	44.2	11.6		35.7	10.0	残存率 60%
				10	壺	南南西	55.0	15.0		40.9	10.2	残存率 50%
				11	壺	南南東	(32.3)	—		—	—	残存率 40%
				12	壺	南南西	41.2	12.7		29.0	9.9	残存率 95%
				13	壺	北北東	52.9	17.2		34.3	11.0	残存率 90%
				14	壺	東南東	39.1	12.2		32.6	11.0	残存率 40%
				15	壺	—	—	平縁, 口縁端部にキザミ, [口径 17.2]	無文	無文	—	遺構底面に破片で散在
S K 3	1 トレ	平成 18 年・3 次	8 点	K	壺	—	41.7	14.2		33.6	9.8	残存率 95% 昭和 55 年頃出土、平成 7 年寄贈
				1	壺	北北西	33.2	13.0		22.7	8.0	残存率 100%
				2	壺	南東	(36.8)	11.3		31.7	—	残存率 50%
				3	壺	北西	30.0	17.6		45.4	—	残存率 50%
				4	壺	南	43.6	14.3		29.1	10.9	残存率 80%
				5	壺	—	(15.4)	—		24.5	—	残存率 30%
				6	壺	東南東	45.6	12.0		30.6	9.6	残存率 60%
S K 4	1 トレ	平成 18 年・3 次	8 点	7	壺	直立	(19.8)	—		—	9.0	残存率 30%
				1	壺	西	73.5	19.0		49.3	17.0	残存率 80%
				2	壺	直立	(26.2)	12.0		24.2	12.0	残存率 60%
				3	壺	直立	44.6	14.8		30.6	8.8	残存率 60%
				4	壺	直立	60.9	18.7		40.2	11.5	残存率 60%
				5	壺	直立	58.2	16.0		35.0	12.0	残存率 60%
				6	壺	直立	53.7	12.7		28.8	10.4	残存率 70%
				7	壺	南東	(22.8)	(6.7)		17.9	9.4	残存率 70%
S K 5	1・4・25 トレ	平成 18・第 1・3 次	13 点	8	壺	西	22.1	7.6		21.8	7.4	残存率 80%
				1	壺	南南東	50.6	18.9		29.7	13.8	残存率 80%
				2	壺	南南東	39.5	13.0		26.8	11.0	残存率 50%
				3	壺	南東	53.3	16.0		40.5	10.6	残存率 80%
				4	壺	南東	(52.9)	14.5		39.9	14.6	残存率 80%
				5	壺	南南東	47.9	11.7		28.1	12.0	残存率 90%
				6	壺	南南東	(23.9)	10.3		20.4	8.0	残存率 70%
				7	壺	南東	[35~40]	—	無文	疑縄文 (オオバコ)	—	
				8	壺	南南東	[35~40]	平縁, 複合口縁に縄文	無文	縄文 L もしくは L R	—	
				9	壺	南東	[50~55]	平縁, 単純口縁[口径 14]	無文	附加条縄文 L R + R, まばらに結節縄文	—	
				10	壺	南南東	[35~38]	波状, 複合口縁に縄文 L R [口径 12]	無文	沈線で区画した磨消縄文による文様	—	
				11	壺	南南東	[45~50]	複合口縁に縄文, [口径 12]	無文	条痕文	—	
				12	壺	南東	—	平縁, 単純口縁[口径 14]	条痕文	条痕文	—	
				13	壺	南南東	—	—	無文	縄文, 結節縄文	—	

遺構	出土位置	調査	点数	土器番号	器種	主軸方向	器高 (cm)	口縁部	頸部	胴部	底面	備考
S K 6	1 トレ	平成 18 年	3 点	1	壺	東南東	39.1	17.2		27.0	10.3	残存率 70% 滑石玉副葬
				2	壺	東	(53.6)	(12.6)		35.0	12.9	残存率 70%
				3	壺	東	44.0	15.1		33.4	11.2	残存率 80%
S K 19	4 トレ	1・4 次	1 点	1	壺	南南東	—	—	無文	縄文 L R	—	
S K 20	4 トレ	1 次	1 点	1	壺	北	—	—	無文	附加条縄文	—	
S K 21	4 トレ	1 次	1 点	1	壺	倒立, やや西に傾く	—	—	無文	縄文 L R もしくは附加条縄文	—	
S K 23	8 トレ・C 地区	1・3 次	15 点	1	壺	直立, やや西に傾く	—	—	—	条痕文	—	
				2	壺	直立	—	—	無文	条痕文	—	
				3	壺	南	—	—	無文	L R 縄文	—	
				4	壺	南東	—	—	—	条痕文	—	
				5	壺	南	—	—	—	縄文 L R	—	
				6	壺	直立, やや東に傾く	—	—	—	条痕文	—	
				7	壺	直立, やや東に傾く	—	—	—	条痕文	—	
				8	壺	東	[30]	—	—	中央部: 縄文 L R, 下部: 条痕文	無文	
				9	壺	北	—	—	無文	条痕文	—	
				10	壺	南南東	—	—	—	条痕文	—	
				11	壺	南東	—	—	—	条痕文	—	
				12	壺	直立, やや東に傾く	—	—	—	条痕文	—	
				13	壺	南東	—	—	—	条痕文	—	
				14	壺	南東	[50~55]	平縁, 複合口縁に縄文	無文	上部: 条痕文, 下部: 無文	—	
				15	壺	直立	—	—	—	条痕文	—	
S K 24	8 トレ	1・3 次	5 点	1	壺	西南西	[45]	—	—	条痕文	無文	
				2	壺	—						1 の蓋か
				3	壺	南西	—	—	—	条痕文	—	
				4	壺	西	—	—	—	条痕文	—	
				5	壺	—	—	—	—	条痕文	—	4 の蓋か
S K 25	8 トレ	1・3 次	2 点	1	壺	北西	—	—	—	条痕文	—	
				2	壺	西北西	[40~45]	—	—	条痕文	—	
S K 26	8 トレ	1・3 次	8 点	1	壺	南	50.0	14.9		35.0	12.0	残存率 70%
				2	壺	南西	42.0	15.5		30.0	10.4	残存率 80%
				5	壺	南東	49.6	12.4		34.5	9.8	残存率 95%
				6	壺	南東	46.8	23.0		33.0	10.4	残存率 60%
				7	壺	南	45.2	15.8		33.0	13.0	残存率 60%
				8	壺	南	68.8	25.1		42.7	12.6	残存率 50%
				9	壺	南	41.1	(12.7)		32.8	9.4	残存率 90%
				10	壺	直立	38.5	—		30.8	10.0	残存率 70%
S K 30	8 トレ	1・3 次	1 点	1	壺	東北東	—	—	—	条痕文	—	
S K 59	15 トレ	1・2・3 次	1 点	1	壺	南東	—	—	—	条痕文	—	H18 年調査で SX2 として 1 部取り上げ
S K 60	15 トレ	2・3 次	4 点	1	壺	北東	[50~55]	—	方形帯縄文	上部: 渦文, 下部: 縄文 L R	—	
				2	壺	北東	[40~55]	—	無文	縄文 L R	—	
				3	壺	東南東	[45~50]	—	条痕文	条痕文	—	
				4	壺	直立	[35~38]	—	無文	条痕文	—	
S K 61	15 トレ	2・3 次	3 点	1	壺	南	[70]	—	縄文	上部: 磨消縄文のヒトデ文, 下部: 条痕文	—	
				2	壺	北東	—	—	—	縄文 L R	—	
				3	不明	北東か		—		—	—	
S K 108	10 トレ	3 次	3 点	1	壺	西	—	—	—	中央部: 縄文 L R, 下部: 磨消縄文	—	
				2	壺	西	—	—	無文	無文	—	
				3	壺	西	—	—	無文	上部: 縄文 L R, 下部: 条痕文	—	

遺構	出土位置	調査	点数	土器番号	器種	主軸方向	器高 (cm)	口縁部	頸部	胴部	底面	備考
S K 110	10 トレ	3 次	4 点	1	壺	南南西	—	—	羽状文, 平行沈線	上部: 羽状文, 平行沈線, 下部: 条痕文	—	
				2	壺	北西	—	—	—	縄文 L R + R R	—	
				3	壺	西北西	[45~50]	—	—	条痕文		
				4	壺	倒立	—	—	—	縄文 L R + R R	—	3 の蓋
S K 113	C 地区	3 次	2 点	1	壺	南西	[40]	—	—	条痕文	—	
				2	壺	南西	[46]	—	—	粗い縦ナデ	—	
S K 114	C 地区	3 次	6 点	1	壺	南南東	[45]	—	—	上部: 結節文 3 列, 中央部~下部: 縄文 L R + R	—	
				2	壺	西南西	[33~35]	—	—	上部: 結節文, 中央部~下部: 条痕文	—	
				3	壺	南	[55]	—	—	条痕文	—	
				4	壺	北西	—	—	—	—	—	
				5	壺	北東	—	—	—	縄文 L R	—	
				6	壺	北か	—	—	—	中央部: 縄文 L R, 下部: 条痕文	—	
S K 115	C 地区	3 次	4 点	1	壺	東北東	(55)	—	—	条痕文	木葉痕	
				2	壺	南東	(40)	—	無文	条痕文	—	
				3	壺	南南西	[20]	平縁	条痕文	条痕文	—	一部破片とありあげ
				4	壺	直立	—	—	—	上部: カナムグラ回転文 下部: 無文	—	
S K 116	C 地区	3 次	1 点	1	壺	直立	(12)	—	—	無文	—	
S K 117	D 地区	3 次	13 点	1	壺	南	—	—	—	条痕文	—	
				2	壺	南	—	—	—	条痕文	—	
				3	壺	南	—	—	—	条痕文	—	
				4	壺	北	—	—	—	条痕文	—	
				5	壺	西北西	(35)	—	—	条痕文	—	
				6	壺	直立	—	—	—	条痕文	—	
				7	壺	南	—	—	—	条痕文	—	
				8	壺	南	—	—	—	条痕文	—	
				9	壺	南南西	—	—	—	無文	—	
				10	壺	南南東	—	—	—	中央部: 条痕文, 下部: 無文	—	
				11	壺	南南西	[45~50]	—	—	—	—	
				12	壺	南南東	—	—	—	条痕文	—	
S K 118	D 地区	3 次	5 点	1	壺	東北東	[45.0~50.0]	—	—	中央部: 縄文 L R, 下部: 無文	—	
				2	壺	北北西	—	—	—	縄文 L R	—	
				3	壺	直立	—	—	—	無文	—	
				4	壺	北西	—	—	—	縄文 L R	—	SX3 として一部取り上げ
				5	壺	直立か	—	—	—	—	—	
S K 136	24 トレ	3 次	1 点	1	壺	南東	—	—	—	下部: L R R R R または L R + 2 R 縄文	無文	
S K 152	25 トレ	3 次	2 点	1	壺	南東	—	—	無文	縄文 L R	—	
				2	壺	南南東	—	—	—	条痕文	—	
S K 153	25 トレ	3・4 次	8 点	1	壺	東	—	平縁, 単純口縁	—	縄文 L R	—	
				2	壺	東	—	平縁, 単純口縁	無文	上部~中央部: 条痕文, 下部: 縄文 L R	—	
				3	壺	南南東	—	—	—	条痕文	—	
				4	壺	南南東	—	—	—	条痕文	—	
				5	壺	東南東	—	—	無文	縄文 L R	—	
				6	壺	東北東	—	—	—	縄文 L R	—	
				7	壺	東北東	—	平縁, 単純口縁	無文	単節縄文 L R・	上げ底	
				8	壺	東北東	—	平縁, 複合口縁	—	—	—	
				9	蓋	倒立	3.4	平縁	—	磨消縄文のヒトデ状文, 赤彩	—	取り上げ

遺構	出土位置	調査	点数	土器番号	器種	主軸方向	器高 (cm)	口縁部	頸部	胴部	底面	備考
S K 164	4トレ	4次	6点	1	浅鉢	倒立	—	平縁，横走沈縁，穿孔。口径[16]	—	縄文 L R	—	
				2	壺	西	—	—	—	無文	—	
				3	壺	北	—	口径[6~7]	—	磨消縄文	—	
				4	壺	南	—	平縁，複合口縁	—	縄文 L R	—	
				5	壺	南	—	小波状，複合口縁	無文	条痕文	—	
				6	壺	南	—	波状，複合口縁	無文	条痕文	—	
S X 1	1トレ	1次	4点	1	壺	東	(37.7)	(12.2)		25.5	12.0	残存率 60%
				2	甕	—	—	40.0		39.8	—	残存率 20%
				3	甕	—	—	28.0		—	11.6	残存率 15%
				4	壺	東	(33.7)	12.2		25.1	—	残存率 40%

(2) 埋没保存状況

確認調査では、遺構の保存を念頭に置いているため、原則として遺構の掘り込みはしていない。従って、これら未掘の遺構の下に未発見の再葬墓等が所在している可能性は十分にあることは考慮しておかなければならない。現在 100 個体近くの土器が埋没保存という形で遺跡に残されている。



第 5・152・153 号土坑確認状況

(3) センサー埋設

発掘調査では、検出した再葬墓遺構は基本的に掘り込みを行わず、また、出土遺物は取り上げず原位置に残した。検出した遺構や遺物を現地に露出した状態で保存した場合、外気の寒暖差や凍結・融解による影響を受けることが懸念される。そのため、調査が終了したトレンチには、全体に目印となり、透水性も高い山砂を薄く撒き、掘削土をかけて埋め戻している。泉坂下遺跡で確認されている約 7 割の再葬墓は、埋納土器とともに、上述した方法による埋没保存を行っている。

泉坂下遺跡では、遺構が地表面から比較的浅い位置に存在するため、出土した遺物は、埋没保存であっても外気の影響を受けることが懸念された。土壌水分センサーと温度センサーを設置し埋没環境を事前に調査した結果、比較的多量の降雨によって土壌水分量が上昇しても、数日のうちに水分量が安定化する様子が見られた。また、土中では+5℃を下回ることがなく、凍結融解が生じるおそれがない、比較的安定した環境であることが確認された。



第 5・152・153 号土坑保護措置
(山砂を目印に散布)

6. その他

(1) 再葬墓の時代の自然環境

再葬墓の設営された弥生時代の自然環境の考察のため、第26号土坑の覆土を用いて、以下の分析を行った。

①花粉分析

覆土内に残存する花粉を分析したものが表3-5である。ただし、残りやすいものが残っていることに注意する必要がある。

表 3-5 花粉分析結果

	SK26 2 No.109	SK26 5 No.123	SK26 下層 No.139
木本花粉	4	1	14
マツ属	3	1	10
スギ属	—	—	2
コナラ属コナラ亜属	—	—	1
コナラ属アカガシ亜属	—	—	1
イボタノキ属	1	—	—
草本花粉	0	1	0
イネ科	—	1	—
シダ植物孢子	0	2	10
シダ植物孢子	—	2	10
合 計 総花粉・孢子（不明を除く）	4	4	24

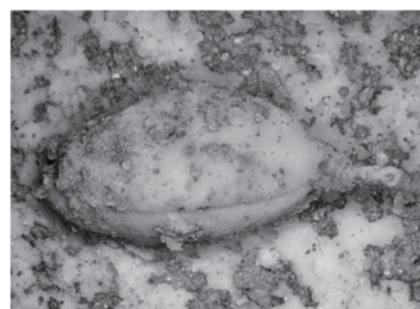
②炭化物種実

覆土内に残存する炭化物のうち、種実類の分析結果を見るとオニグルミが圧倒的に多いことがわかる（表3-6）。ただし、残りやすいものが残っていることに注意する必要がある。

また、オニグルミ、クリ、トチノキ等は縄文時代から食用されていたため、埋納の際に周囲の土に含まれていたものが混入した可能性も考える必要がある。

③圧痕分析

再葬墓の第26号土坑で出土した土器10外面にあった圧痕をレプリカ法で調べたところ、イネの粃の痕と判明した。壺形土器を作る際、身近に栽培種であるイネの粃があったことが判る。



第26号土坑土器10圧痕

④小結

これらの結果から、再葬墓の営まれた時代の環境について考えてみる。

花粉分析では、マツ属のほか、スギ属・コナラ属などが、炭化種実分析では、オニグルミのほか、クリ・トチノキなどが確認できる様子から、高木になる木本類が主体であり、これらによって河畔林が形成されていたであろうことは想像できる。

その一方、栽培種であるイネやムギ類等が確認でき、これらが再葬墓を営んだ人々にとって身近な存在、すなわちムラの近くに田畑のある環境があったと考えられる。

表 3-6 SK26 炭化種実出土状況

			栽培種				栽培?		その他の木本類							合計	
			イ ネ	オ オ ム ギ	ム ギ	コ ム ギ	ア サ	ヒ エ 近 似 種	ダ イ ズ 類 ?	オ ニ グ ル ミ	ク リ 果 皮 着 点	ク リ 果 皮	ク リ 果 実	ク リ 子 葉	ト チ ノ キ		ム ク ロ ジ
採取位置	層位	No.															
土器①内	上層	25	-	-	-	-	-	-	69 +	-	-	-	1	-	-	70	
土器①内	下層	15・26	-	-	-	-	-	-	120 +	1	4	-	-	-	2	127	
土器①内		43・59	-	-	-	-	-	-	77 +	1	1	-	-	-	-	79	
土器②内	下層	13・14	-	-	-	-	-	-	76 +	-	4	-	1	1	1	83	
土器②と土器⑤の間		28・52	-	-	-	-	-	-	73 +	1	2	-	2	2	-	80	
土器②内		37	-	-	-	-	-	-	35 +	-	-	-	-	1	-	36	
土器③内	口縁部付近	55	-	-	-	-	-	-	36 +	-	-	-	-	3	-	39	
土器③内	上層	83	-	-	-	-	-	-	65 +	-	-	-	-	2	-	67	
土器③内西半部	下層	17・18	-	-	-	-	-	-	87 +	-	3	-	-	3	-	93	
土器③内東半部	下層	16	-	-	-	-	-	-	42 +	-	-	-	-	-	-	42	
土器③内	下層	82	-	-	-	-	-	-	49 +	-	1	-	-	4	5	59	
土器③内		44・80・86	-	-	-	-	-	-	117 +	1	3	-	-	7	3	131	
土器④内	上層	30	-	-	-	-	-	-	45 +	1	3	-	-	2	1	52	
土器④内	下層	19・34	-	-	-	-	-	-	79 +	-	2	-	-	-	1	82	
土器④内		31・54	-	-	-	-	-	-	80 +	2	3	-	-	6	1	92	
土器④の下側		23	-	-	-	-	-	-	35	1	-	-	-	-	-	36	
土器⑤内	上層	48	-	-	-	-	-	-	41 +	2	7	-	-	1	1	52	
土器⑤内	下層	20・47	-	-	-	-	-	-	103 +	1	2	-	4	2	-	112	
土器⑤内		27・29・85	-	-	-	-	-	-	95 +	2	2	-	2	2	-	103	
土器⑥内	上層	57	-	-	-	-	-	-	36 +	-	-	-	-	-	1	37	
土器⑥内	下層	21・58	-	-	-	-	-	-	78 +	3	5	-	-	-	3	89	
土器⑥内		50・56	-	-	-	-	-	-	76 +	-	1	-	-	-	-	77	
土器⑦内	上層	39	-	-	-	-	-	-	47 +	-	-	-	-	1	-	48	
土器⑦内	下層	9・12・36・40	-	-	-	-	-	-	132 +	2	1	-	3	1	2	141	
土器⑦内		89	-	-	-	-	-	-	51 +	1	3	-	-	5	2	62	
土器⑧内	上層	38	-	-	-	-	-	-	41 +	-	2	-	-	1	-	44	
土器⑧内	下層	24・35	-	-	-	-	1	-	72 +	1	-	-	-	-	-	74	
土器⑧内		53・81・90	-	-	1	-	-	-	93 +	-	3	2	-	4	1	104	
土器⑨内	下層	87	-	-	-	-	-	-	41 +	-	1	-	-	2	5	49	
1区-1		2	-	-	-	-	-	-	60 +	-	-	-	1	3	4	68	
1区-2		68	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	3	
1区-3		5	-	-	-	-	-	-	60 +	-	-	-	3	4	2	69	
1区-4		1	-	-	-	-	-	-	60 +	-	-	-	-	-	2	62	
1区-5		78	-	1	-	-	-	-	60 +	-	-	-	-	3	9	73	
1区		95・103	1	-	-	2	-	-	113 +	4 +	6 +	-	5	12 +	5	148	
2区-1		102	-	-	-	-	-	-	56 +	2	-	-	1	-	3	62	
2区-2		66	-	-	1	-	-	-	130 +	-	-	-	-	1	2	134	
2区-3		60	-	-	-	-	-	-	97 +	-	1	-	-	5	3	106	
2区-4		3	-	-	-	-	-	-	47 +	-	-	-	-	-	-	47	
2区-5		73	-	-	-	1	-	-	60 +	-	-	-	-	7	3	71	
2区		100	-	-	-	-	-	-	50 +	-	1	-	-	2	2	55	
3区-1		104	1	-	-	1	-	-	75 +	-	-	-	3	4	3	87	
3区-2		61	2	-	-	1	-	-	82 +	-	3 +	-	-	10 +	5	103	
3区-3		64	-	-	-	-	-	-	61 +	-	2	-	-	8	5	76	
3区-4		63	-	-	-	-	-	-	76 +	-	-	-	-	2	1	79	
3区-5		98	-	-	-	-	-	-	60 +	-	-	-	9	1	4	74	
3区-6		62	-	-	1	2	-	-	44 +	-	-	-	-	3	-	50	
3区-7		69	-	-	-	1	-	-	41 +	-	2	-	2	4	3	53	
3区	上層	97	-	-	-	-	-	-	60 +	-	-	-	4	3	5	72	
3区	下層	105	-	-	-	-	-	-	68 +	-	-	-	-	1	2	71	
3層東部	3層	76	-	-	-	-	-	-	40 +	-	-	-	-	7	-	47	
3区		91・99・106	-	-	-	1	-	-	134 +	-	2	-	8	8	3	156	
4区-1		4	-	-	-	-	-	-	44	-	-	-	-	-	-	44	
4区-2		8	-	-	-	1	-	-	36 +	-	-	-	-	-	-	37	
4区-3		7	-	-	-	-	-	-	25	-	2	1	2	-	-	30	
4区-4		6	-	-	-	1	-	-	35 +	-	2	-	-	2	1	41	
4区		71・77・88・94・96・101	-	2	-	2	-	-	356 +	2	4	-	6	12	10	396	
ベルトA(4区)		72	-	-	-	1	-	-	34	-	-	-	2	1	1	39	
ベルトA(サンプル①)		65	-	-	-	-	-	-	60 +	-	-	-	-	3	1	64	
ベルトA(サンプル②)		70	-	-	-	-	-	-	49 +	-	1	-	-	2	1	53	
ベルトA		93	-	-	-	-	-	-	42	-	-	-	-	-	1	43	
ベルトB(1区)		67	-	-	-	-	-	-	60 +	-	-	-	-	-	3	63	
ベルトB		92	-	-	-	-	1	-	61 +	-	1	-	-	1	2	66	
ベルトC(3区)		75	-	-	-	-	-	-	62 +	-	-	-	3	2	2	69	
ベルトC		79	-	-	-	-	-	-	40 +	-	-	-	-	-	1	41	
ベルトD		74	-	-	1	-	-	-	61 +	-	-	-	-	1	1	64	
土坑内一括		22・41・42・45・46	-	-	-	1	-	-	197 +	-	7	-	-	3	5	213	
合計			4	3	4	15	1	1	2	4690 +	28 +	87 +	3	62	165 +	124	5189

（２）放射性炭素年代測定

調査で出土した土器に付着する炭化物を用いて、放射性炭素年代測定を実施した。誤差はあるものの、再葬墓に埋納された土器から採取した炭化物は、概ね紀元前 200～400 年の値を示した。これは、再葬墓の営まれた弥生時代の年代観とも矛盾するものではない。

なお、参考のために実施した縄文時代晩期初頭の土器から採取した炭化物は、概ね紀元前 800～1000 年の値を示した。これは、縄文時代晩期の年代観とも矛盾するものではない。

両者の年代比較によって、縄文時代晩期の集落が営まれた時代は、再葬墓の時代と 600 年程度の開きがあることが確認できた。これは従来の研究成果と整合するものであり、泉坂下遺跡でも従来の年代観どおりであることが明らかになった。

（３）その他

表 3-4 に記載したとおり、泉坂下遺跡の再葬墓に埋納された弥生土器を概観すると、同じ再葬墓内に埋納されていながらも、土器の大きさや施された文様など、その特徴は実にバラエティ豊かであることに気付かされる。また、それらの土器も、煮炊きの痕跡や摩耗など、一定程度の生活感があることも印象的である。このことから、再葬墓は、離れて生活を送っている人々がめいめいに埋納用の土器を持ち寄り、それに骨を納めて、共同で埋納した墓であると考えられている。

また、泉坂下遺跡では、再葬墓は 30 基、再葬墓に埋納された土器は納骨以外の目的のものも含めて計 153 点が確認されている。一つの土器に何人分の骨が入っていたかは定かではないが、泉坂下遺跡には、相当の人数の弥生人が眠っていることになる。この時代は農耕が始められたばかりで、ムラの規模も、数軒程度の小規模なものであったと考えられていることから、かなりの範囲のいくつものムラから、人々が泉坂下遺跡に集まってきたであろうことが想像される。くわえて、いくつもの土器がしっかり納まる大きさの堅穴を開削し、その底面に土器を整然と並べ、その上から土をかけて埋めるという作業は、それなりの人数で行う必要があるだろう。

よって、再葬墓を営んだ弥生人は、普段は離れて暮らしているながらも、埋葬に合わせて大人数が泉坂下遺跡に集合していたものと考えられている。であるならば、埋葬に合わせて、飲食やマツリのようなものが行われた可能性が考えられるが、泉坂下遺跡の調査ではその痕跡を確認することはできなかった。

また、図 3-5 に示した泉坂下遺跡の再葬墓 30 基のうち、遺構同士の重複が確認できた例が 5 例あった。ただし、遺構の中心を切るような大きな重複はなく、いずれも一部を掠めるようにして浅く切るものである。重複する再葬墓同士の時期差は明らかではないが、ここほど再葬墓が密集する区域で、ほとんど重複せずに再葬墓が設営されたということは、当時の地表面に再葬墓の目印があり、それを意識して設営していたと考えるほうが自然である。

地表面の目印として考えられているものはいくつかあるが、最も確実にあったであろうと考えられるのが、マウンド状に土を盛った、いわゆる土饅頭である。壺形土器を埋めたところに土が盛られていることで、次の再葬墓を設営する際には、そこを避けながらも隣に次の穴を掘ることができるのである。であるならば、再葬墓が営まれた当時は、土饅頭が、ひしめきあうに並んでいたことだろう。

7. 地形復元図の作成

弥生時代における泉坂下遺跡の特徴を整備に反映するために、地形復元の検討を行った。

(1) 作成方法

- ・弥生時代の生活面は、I層もしくはその上にあったが、攪乱・流失しているため、発掘調査成果（Ⅲ層の高さ、土坑の深さ、土層の傾斜など）から当時の生活面高を推定した。
- ・各トレンチの推定生活面高さ（トレンチ毎1～3箇所）を基に、10cm 毎の等高線（コンタ）図を作成した。
- ・調査の希薄な南半分、高さ不明の縁辺部などは、現状地形（Ⅲ層上面）や国土地理院空中写真（昭和23年）を参照しながら、滑らかに調整して図化した。

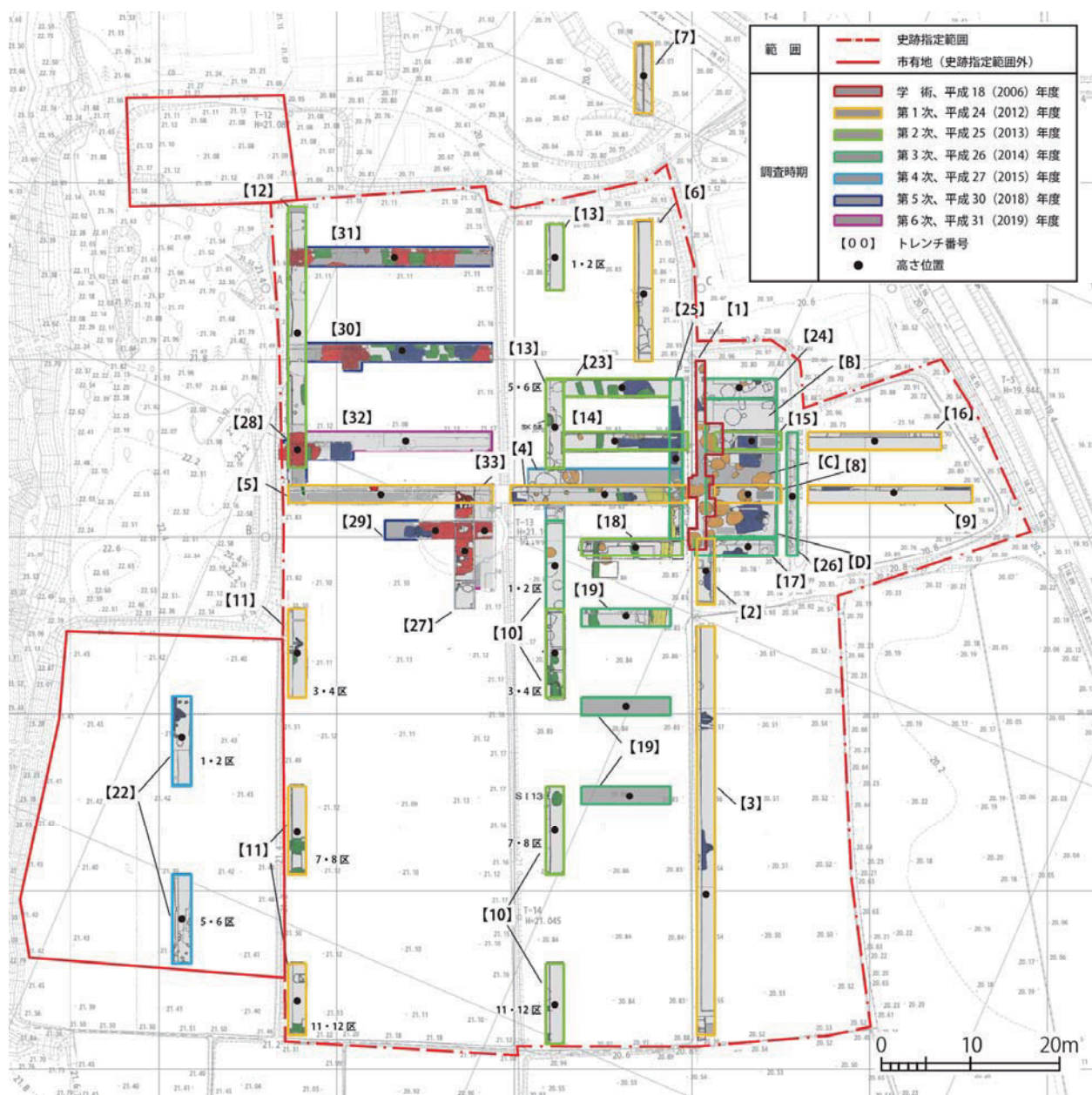


図 3-8 トレンチ箇所と高さ位置分布図

表 3-7 トレンチ別 高さ整理表 ※標高を表示（単位：m）

* D：弥生時代の推定高さは、各トレンチの長さに応じて、複数設定した。

* 13 トレンチ（1・2区）は弥生時代の遺構が確認できず、その他の時代の遺構高さを参考値として掲載した。

トレンチ		現状高 A (Ⅰ層上面)	遺構確認面 B (Ⅱ層上面)	今市層上面 C (Ⅲ層上面)	弥生当時の 推定生活面 D	備 考
1						
2	北	20.8	20.5	20.1	21.0	1号に近い
	南	20.8	20.5	20.1	20.9	
3	北	20.5	20.3	20.0	20.8	
	中央	20.5	20.3	20.0	20.7	
	南	20.5	20.3	20.0	20.6	
4	東	20.8	20.5	20.2	21.2	
	中央	20.8	20.5	20.2	21.4	
	西	20.8	20.5	20.3	21.6	
5	東	21.1	20.8	20.3	21.7	
	中央	21.1	20.8	20.4	21.8	
	西	21.1	20.8	20.6	22.0	
6	北	20.8	20.6	19.9	20.6	
	南	20.8	20.6	20.0	20.8	
7	南	20.0	—	19.2		整備対象外
8	中央	20.8	20.6	—	21.0	
9	東	20.8	20.6	20.2	20.8	
	中央	20.8	20.6	20.3	20.9	
	西	20.8	20.6	20.3	20.9	
10 1・2区	北	20.8	20.6	—	21.4	
	南	20.8	20.6	—	21.4	
10 3・4区	北	20.8	20.6	20.2	21.4	
	南	20.8	20.6	20.2	21.3	
10 7・8区	北	20.8	20.6	20.2	21.2	
	南	20.8	20.6	20.2	21.1	
10 11・12区	北	20.8	20.6	20.2	21.0	
	南	20.8	20.6	20.2	20.9	
11 3・4区	北	21.1	20.8	20.6	21.8	
	南	21.1	20.8	20.4	21.6	
11 7・8区	北	21.1	20.8	20.4	21.4	
	南	21.1	20.8	20.3	21.2	
11 11・12区	北	21.1	20.8	20.3	21.0	1次調査 ⅠC層確認
	南	21.1	20.8	20.2	20.9	1次調査 ⅠC層確認
12	北	21.1	20.9	20.2	21.3	
	中央北	21.1	20.9	20.4	21.6	
	中央南	21.1	20.9	20.6	21.8	
	南	21.1	20.9	20.6	22.0	
13 1・2区	北	20.8	20.6	未確認 (20.0未満?)	20.4	2次調査 盛土層確認
	南	20.8	20.6	20.0	20.6	3次調査 盛土層確認

トレンチ		現状高 A (Ⅰ層上面)	遺構確認面 B (Ⅱ層上面)	今市層上面 C (Ⅲ層上面)	弥生当時の 推定生活面 D	備 考
13 5・6区	北	20.8	20.6	20.0	21.1	
	南	20.8	20.6	20.2	21.4	
14	東	20.8	20.6	20.2	21.2	
	西	20.8	20.6	20.2	21.3	
15	東	20.8	20.6	20.2	21.0	
	西	20.8	20.6	20.2	21.0	
16	東	20.8	20.6	20.1	20.8	
	西	20.8	20.6	—	20.9	
17	東	20.8	20.5	20.2	20.9	
	西	20.8	20.5	20.2	21.0	
18	東	20.8	20.6	20.2	21.1	
	西	20.8	20.6	20.2	21.3	
19	東	20.8	20.6	20.2	21.3	
	西	20.8	20.6	20.2	21.2	
20						未調査
21						未調査
22 1・2区	中央	21.4	21.0	—	—	指定範囲外
22 5・6区	中央	21.4	21.0	未確認	—	指定範囲外
23	東	20.8	20.6	—	21.1	
	西	20.8	20.6	—	21.1	
24	東	20.8	20.6	—	21.0	
	西	20.8	20.6	20.2	21.1	
25	北	20.8	20.6	20.2	21.1	
	南	20.8	20.6	20.2	21.1	
26	北	21.0	—	20.2	20.9	
	中央	21.0	—	20.3	20.9	
	南	21.0	—	20.2	20.9	
27	北	21.1	20.9	20.3	21.7	
	南	21.1	20.9	—	21.5	
28	中央	21.1	20.8	—	21.8	
29	東	21.1	20.9	—	21.5	
	西	21.1	20.9	20.3	21.7	
30	東	21.1	20.9	20.4	21.5	
	西	21.1	20.9	20.6	21.8	
31	東	21.1	20.8	20.2	21.2	
	西	21.1	20.8	20.4	21.6	
32	東	21.1	20.9	—	21.6	
	西	21.1	20.9	—	22.0	
33	北	21.1	20.9	—	21.7	
	南	21.1	20.9	—	21.5	

(2) 検討結果

【弥生時代の地形の特徴】

- ・ 西側の段丘崖の麓から張り出すような舌状の地形である。
- ・ 西側から東側へ緩やかに低くなる。南半分はなだらかでほぼ平坦である。
- ・ 弥生再葬墓（西群・東群）は、舌状地形の先端、平坦な範囲にまともっている。縄文時代遺構群は、西側で確認されている。

【基準となる勾配】

地 形	西端部高さ (m)	東端部高さ (m)	平均勾配
現状面	21.16	20.8	0.5%
弥生当時の推定生活面	22.0	20.8	1.5%

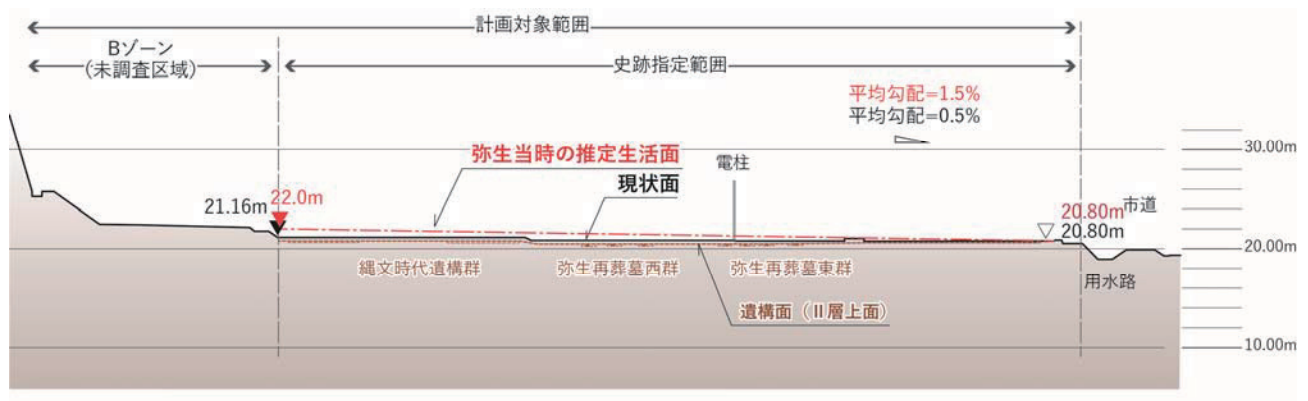


図 3-9 地形断面イメージ図

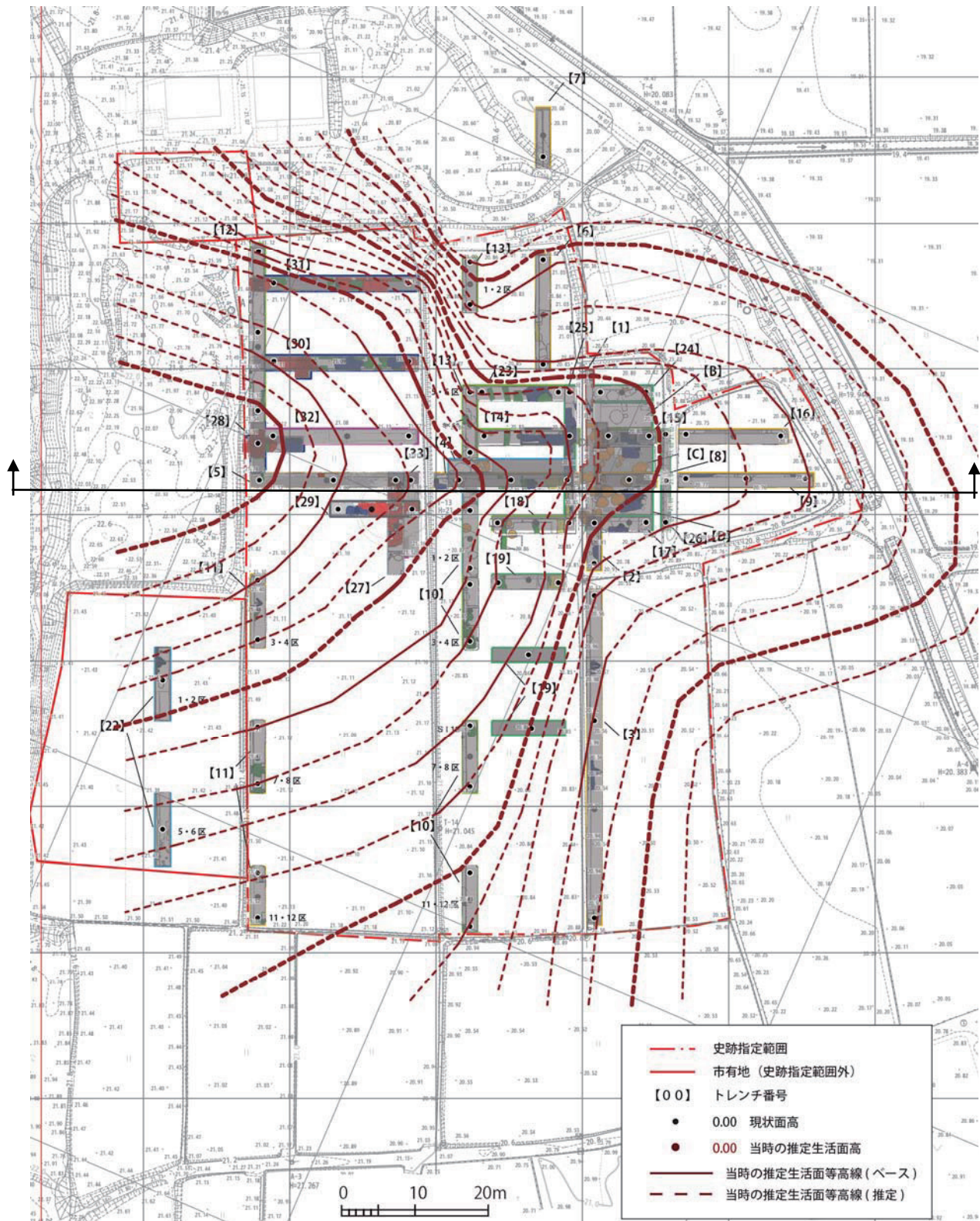


図 3-10 弥生時代の推定生活面の地形復元図

8. 小結

普段は離れたムラで農耕をして暮らす人々が、ある日、壺形土器を担いで泉坂下にぞろぞろと集まってくる。祖先の眠る土饅頭が並んでいる横に、大勢で協力して新たな穴を掘り、骨を入れた土器を並べて埋める。そして、埋めた後には、新たな土饅頭ができた。

再葬墓について、私たちにわからないことはまだまだ多いが、弥生人にとって泉坂下は、大切な祖先を弔い、絆を再確認する、特別な場所であったことは疑いない。



図 3-11 弥生再葬墓を営んだひとびとのくらしとマツリの様子（画：さかいひろこ）
（平成 26 年度企画展資料）

第4節 泉坂下遺跡の管理・活用状況

1. 管理及び公開

史跡泉坂下遺跡は、すべて常陸大宮市が所有する土地である。水田・畑として利用していた当時の畦畔を残したまま、草地として維持している。指定地中央部には電柱が1本存在し、現在も南北に架線されている。指定地の境界には柵などを設けていないことから、現状は自由に

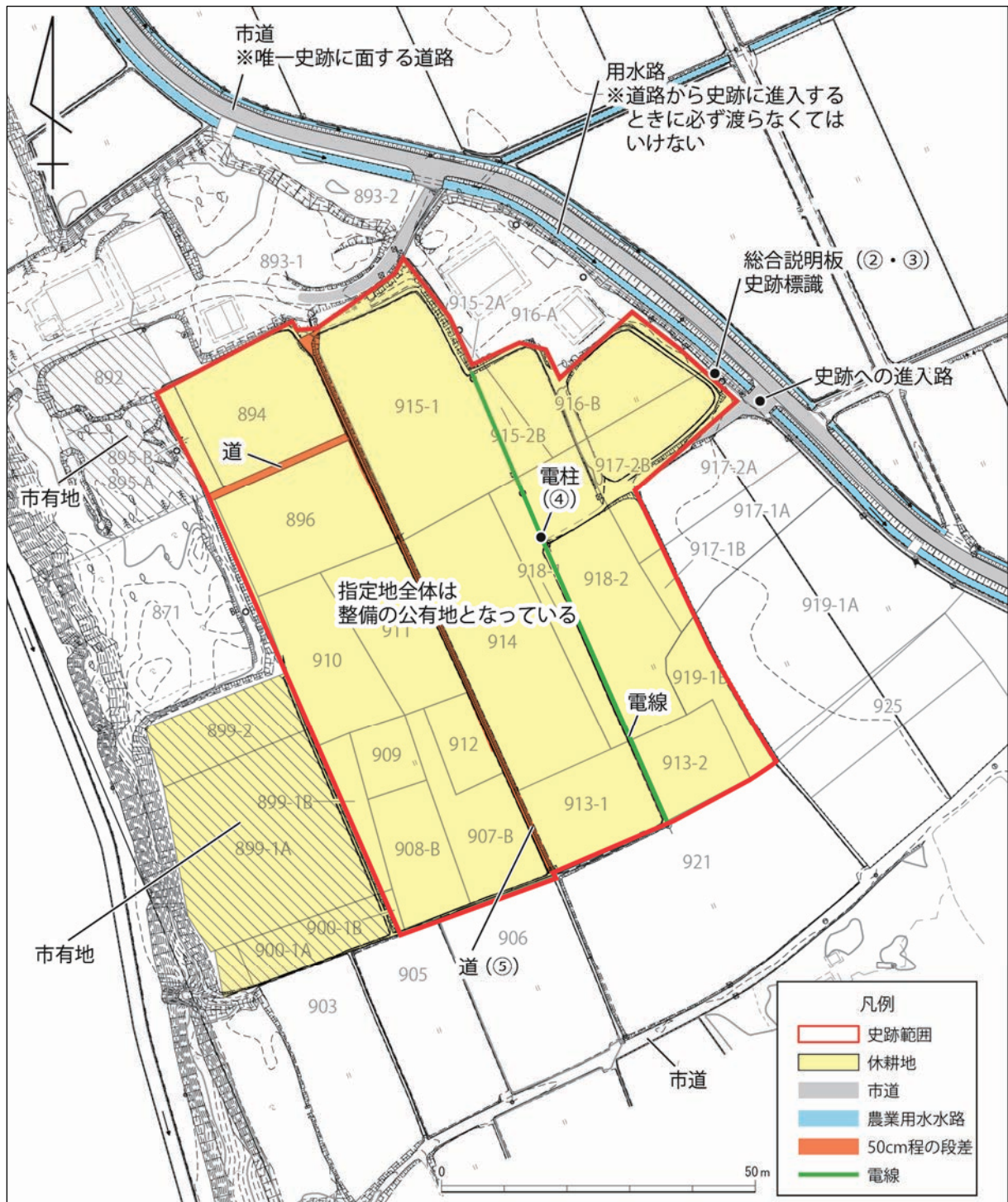


図 3-12 史跡の現況図

立ち入りできる状況である。

史跡指定後に、市道に近い位置に史跡標柱・説明板を設置した。防犯カメラも設置している。近隣に駐車場は無く、周辺道路は狭くて泉坂下遺跡への道順が分かりにくいことから、泉コミュニティセンター駐車場からの徒歩によるアクセスを前提に、要所に誘導標識を設置している。

常陸大宮市は、担当職員が現地の定期的な見回りを行っている。除草作業は委託し、年に数回行っているが、夏期は草の成長が早くて除草作業が追い付かないことがある。



市道脇に設置した標柱・説明板



電柱・電線、畦畔ブロック



泉坂下遺跡への誘導標識

2. 給排水等の状況

(1) 農業用水

史跡指定地の標高について、北西部が高く、北から南、西から東に向かって緩やかに低くなっている。指定地の雨水は、隣接する水田・宅地を通して東側の用悪水路に排水されている。ただし、畦畔で区画された地形を留めることから、滞水しやすい状況である。

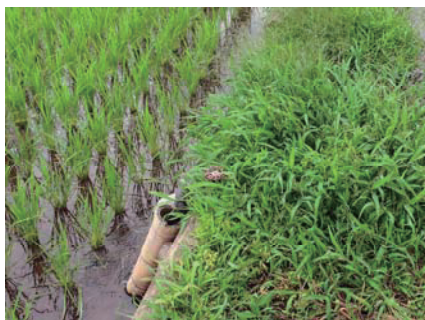
また、指定地の南側境界に水路があり、岩崎用水から隣接する水田に引き入れている。この南側の境界は水田に接して高低差がほとんどないために、指定地内に水が浸透しやすい状況である。



用悪水路への排水経路（写真①）



用悪水路への排水（写真②）



隣接農地への給水（写真③）



隣接農地への給水（写真④）

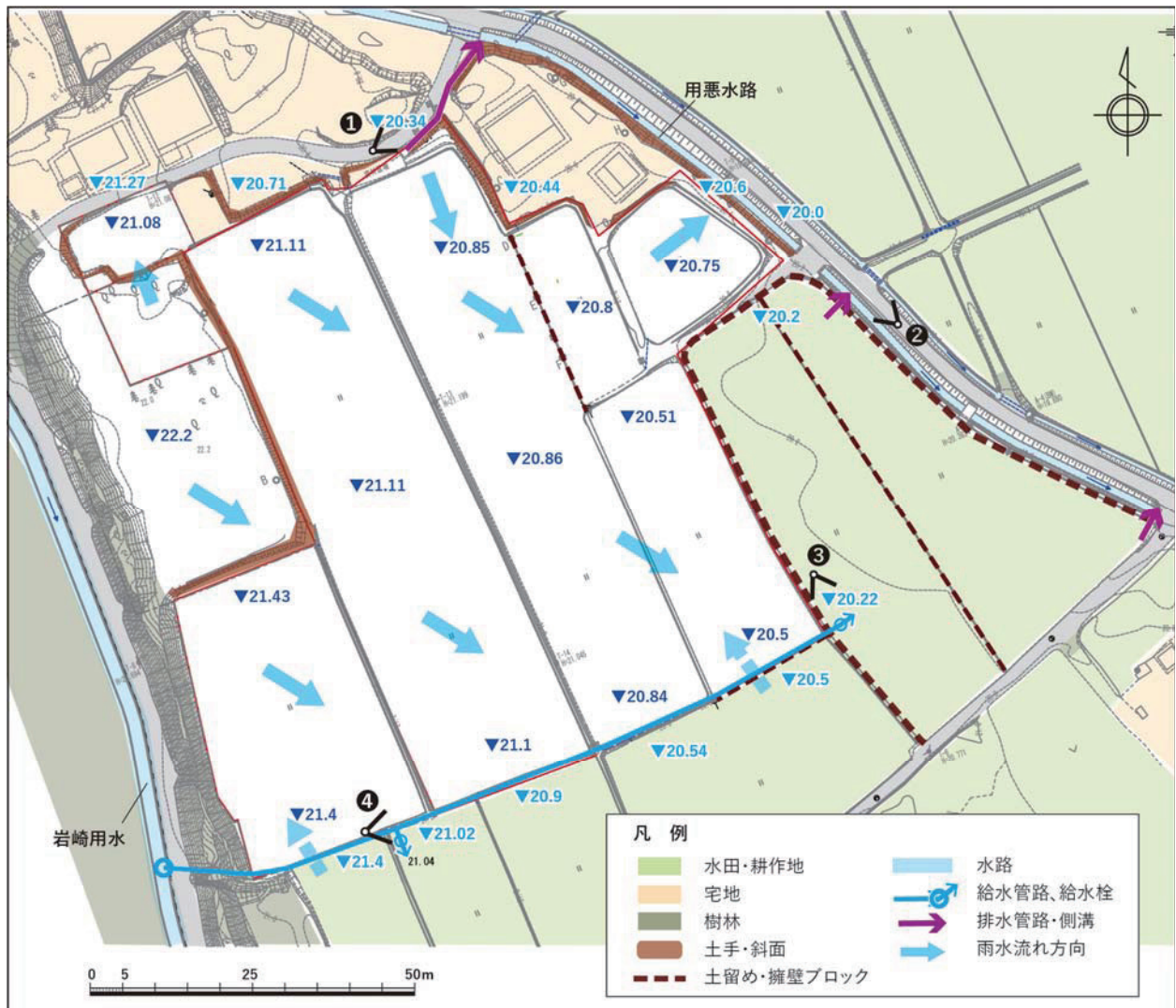


図 3-13 史跡指定地内外の地形・給排水の現状 (●数字は、写真撮影位置)

(2) 電気・上水道・農業集落排水

泉坂下遺跡周辺には、上水道と農業集落排水が配管されている。上水道は、史跡と市道が接する地点から北西約 150m の位置にある。農業集落排水は、同地点から南東約 80m の位置にある。便益施設を設置する際は、これらの上水道及び農業集落排水の利用が可能である。また、電気は史跡指定地内を通過する電柱・電線から、公園用電源として供給可能である。

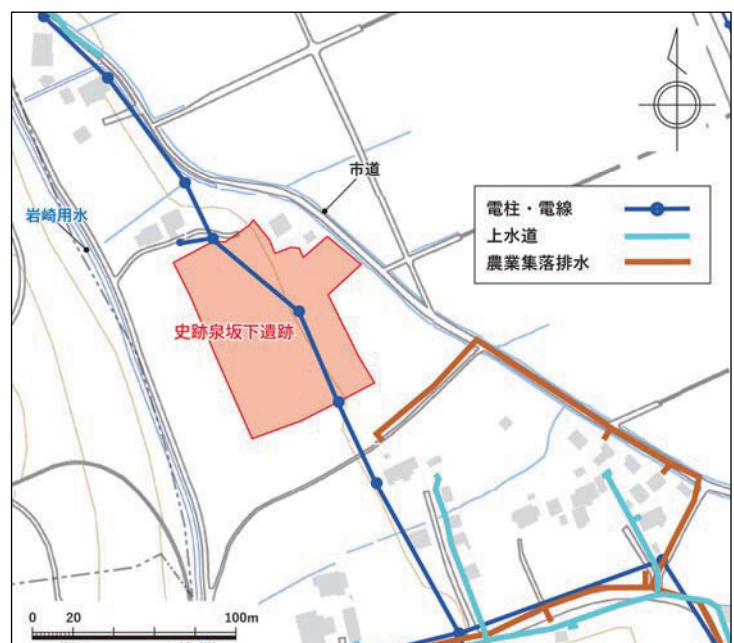


図 3-14 電気・上水道・農業集落排水配置図

3. 出土遺物の保管と展示

重要文化財に指定された人面付壺形土器を含む出土遺物 61 点は、常陸大宮市歴史民俗資料館において保管している。重要文化財を除く出土遺物は、市内の旧大場小学校（現泉坂下遺跡整理作業場）で保管している。

出土品は平成 30 年度（2018）より順次修復作業を行っており、重要文化財及び修復が終わった出土遺物は、常陸大宮市歴史民俗資料館で定期的に企画展等を開催し公開している。



出土品修復協議

4. 活用の取組状況

泉坂下遺跡に対する理解を深め、親近感を高めてもらえるよう、歴史民俗資料館における人面付壺形土器の展示の他、講演会、出前講座、ガイドブック作成等、様々な取組を行っている。

表 3-8 活用事業の一覧

活動内容	実 績	
講演会・講座	平成 27 年（2015）	泉坂下遺跡に学ぶ陶芸講座
	平成 29 年（2017）	シンポジウム「なんだっぺ？泉坂下」
	平成 30 年（2018）	塩田地区会出前講座
	平成 31 年（2019）	岩瀬長寿会出前講座
現地説明会	平成 24 年（2012） ～令和元年（2019）	第 1 次～第 6 次泉坂下遺跡確認調査の現地説明会
学校教育	平成 27 年（2015）	上野小学校出前授業
	平成 29 年（2017）	上野小・村田小学生史跡見学 （小中連携授業に関わる社会科の授業）
	平成 30 年（2018）	上野小・村田小学生発掘体験 （小中連携授業に関わる社会科の授業）
	令和 4 年（2022）	上野小学校 泉坂下遺跡の講演会（リモートによる講座）
	令和 4 年（2022）	山方南小学校出前講座
	令和 5 年（2023）	校長会での講演
地域との連携	平成 29 年（2017）～	「泉坂下遺跡をまもる会」設立。随時イベント時のサポート。
情報発信	平成 29 年（2017）	泉坂下遺跡ガイドブック「いずみのツボ」作成
	令和 5 年（2023）	泉坂下遺跡パンフレット作成
	令和 5 年（2023）	泉坂下遺跡ガイドブック「いずみのツボ」英語版を市ホームページで公開
その他歴史学習・郷土教育	平成 29 年（2017）	「泉坂下あるけるすごろく」作成

（１）講演会・講座

泉坂下遺跡の発掘調査の成果や史跡の価値を周知するため、講演会やシンポジウムを開催している。平成 29 年（2017）には国史跡及び国重要文化財指定を記念したシンポジウム「なんだっぺ？泉坂下」を開催し、約 360 名が参加した。また、生涯学習の一環として、平成 27 年（2015）に公民館講座「泉坂下遺跡に学ぶ陶芸教室」を開講した。そのほか、地区や地域団体からの希望により出前講座を行い、泉坂下遺跡について説明している。

（２）発掘調査の現地説明会

泉坂下遺跡では、これまでに平成 24 年（2012）から、6 次にわたる確認調査を行っており、史跡に対する理解を深めてもらうことを目的として、現地説明会をその都度実施している。第 5 次確認調査現地説明会では 50 名、第 6 次確認調査現地説明会は 72 名が参加した。

（３）学校教育との連携

市内小中学校に対して、出前授業や講演や史跡の現地見学などを行っている。

市内小学校 2 校が小中連携授業に関わる社会科の授業の一環として、平成 29 年（2017）に史跡見学、平成 30 年（2018）に発掘体験を行った。令和 4 年（2022）には出前授業等を市内小学校 2 件で実施した。令和 5 年（2023）には校長会での講演会を行った。

出前授業などの利用は史跡に近い学校が中心であるため、学校教育で利用しやすいプログラムの活用方法の検討や講座の周知などが課題である。

（４）地域との連携

平成 29 年（2017）に「泉坂下遺跡をまもる会」という遺跡愛護団体が設立された。団体の活動として、学習会や研修旅行の実施、現地説明会時の受付や会場への誘導等のイベント時のサポートを行っていたが、近年は目立った活動ができていない。



小学校の遺跡見学



泉坂下遺跡に学ぶ陶芸講座

(5) 情報発信

市のホームページで史跡の紹介や史跡へのアクセスについて説明した記事を掲載している。

また、泉坂下遺跡ガイドブック「いずみのツボ」やパンフレットを作成し、市歴史民俗資料館などの施設に設置するほか、市のホームページで公開し、情報発信を行っている。

(6) その他歴史学習・郷土教育

「泉坂下あるけるすごろく」マップを作成した。

泉坂下遺跡が所在する地域は、「常陸大宮市文化財保存活用計画」において「上野・村田地区 岩崎用水ライン文化財保存活用区域」に位置付けている。岩崎用水路沿い周辺5kmの散策範囲に、泉坂下遺跡をはじめ石仏・石塔、古墳、伝承のある池、縄文時代の遺跡などが存在し、周辺の文化財もあわせて活用できるような取組を行っている。



図 3-15 ガイドブック

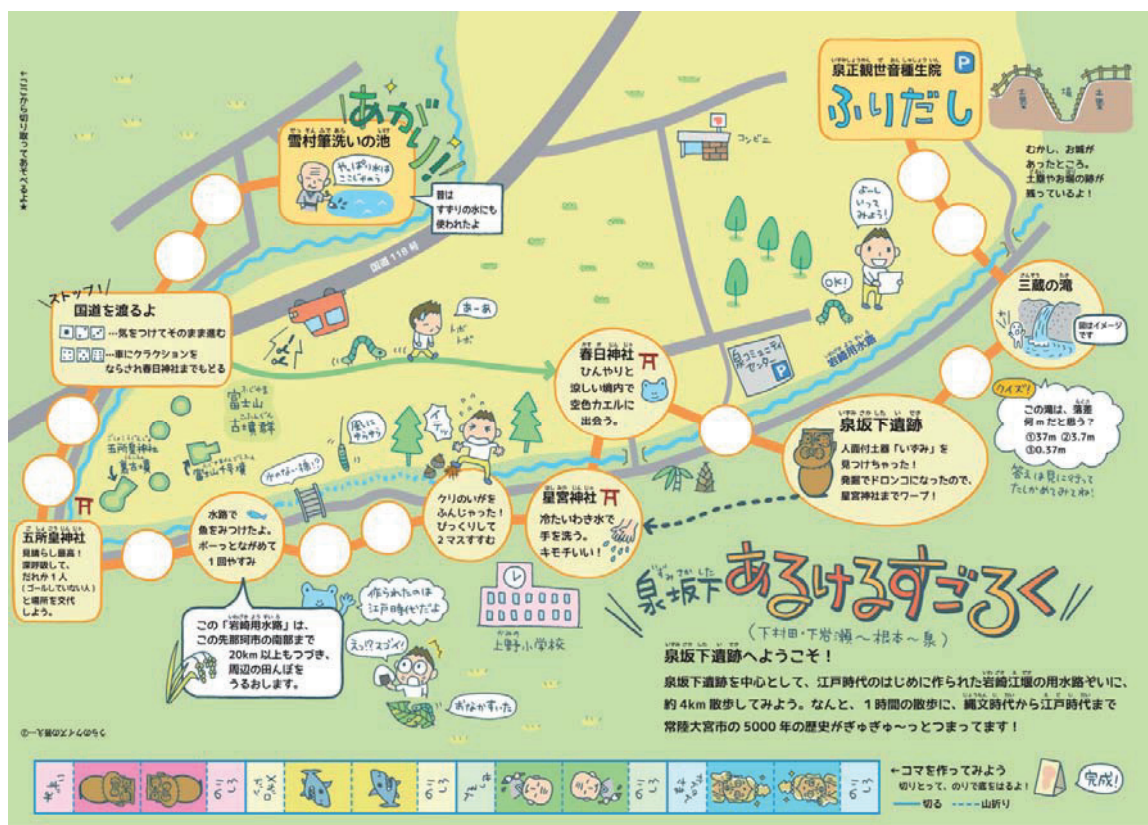


図 3-16 「泉坂下あるけるすごろく」マップ

第5節 史跡の公開活用のための諸条件

1. まちづくり計画における位置づけ

(1) 都市計画マスタープラン

「常陸大宮市都市計画マスタープラン」(令和2年3月)では、地区別構想の大宮地域のまちづくり方針において、市民が誇りや愛着を実感でき、また来訪者にとっても魅力ある「郷土」づくりを進める観点から、地域の重要な資源である泉坂下遺跡を活かすため、遺跡の公園化などを検討することを示している。



図 3-17 大宮地域まちづくり方針図(拡大図)
(「常陸大宮市都市計画マスタープラン」(令和2年3月))

(2) 防災対策（浸水想定区域）

計画地は久慈川に近い位置にあり、氾濫した場合に浸水が想定される区域（浸水想定区域 3.0 m 以上 5.0 m 未満）に該当する。泉坂下遺跡の周辺は、河川に近い低地であることから、大雨による洪水等の災害が危惧される。

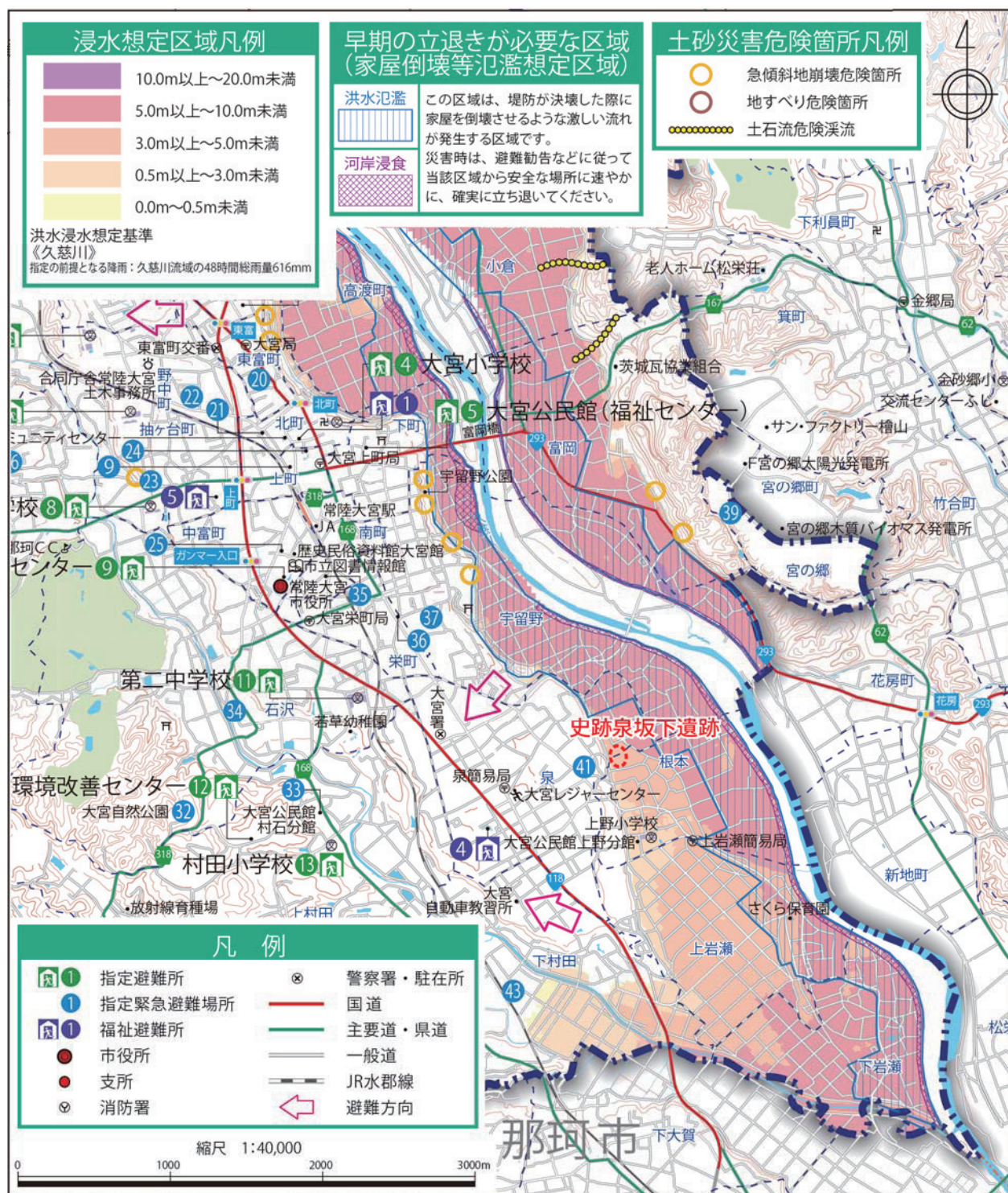


図 3-18 常陸大宮市洪水・土砂災害ハザードマップ大宮地域版（抜粋）
（平成 30 年 3 月 発行：常陸大宮市市民生活部安全まちづくり推進課）

第6節 整備にかかる課題の整理

前節までに掲げた史跡とその周辺の現状、上位計画やまちづくり関連の位置づけ、地域要望等を踏まえて、整備課題を整理する。

検討課題1 / 遺構・遺物を保存し公開するための、保存盛土・動線・造成計画

地中の遺構・遺物は地表面から比較的浅い位置にあり、また地表面は道や水田の境ごとに段差があり、降雨時に雨水が滞水する状況である。遺構・遺物に悪影響を与える要因を除去し、滞水状況を改善することが求められる。

一定の保護盛土層を確保して速やかな雨水排水を行うために、保存盛土・造成計画は史跡整備の基盤となる。また史跡公園としての利用を前提に、弥生時代の地形、遺構展示や植栽なども想定しながら適切な造成計画を行うことが重要である。

現状・既往計画・地域要望	整備の課題
●遺構・遺物の保存に関する現状 ・地下には遺構・遺物が残されており、地表から浅い位置で確認されている。調査の際は極力掘り下げず、多くの遺物は現地で保存している。また、未検出の遺構が存在する可能性がある。 ・史跡指定地中央部に、電柱がある。 ●指定地の地形造成に関する現状 ・指定地は水田や畑として利用されたことから、現状は平坦だが、本来は舌状に張り出す地形の上に再葬墓が作られていた。 ・畦畔の凹凸をとどめており、見学時に歩きにくく、雨が降ると指定地内に水が溜まりやすい。 ・湧水が豊富であり動植物も豊かで、自然環境が良好に保たれた場所に立地している。 ●指定地の保存管理に関する現状 ・史跡にはフェンスや柵を設けておらず、自由に立ち入ることができる。防犯カメラは設置している。	●遺構・遺物の保存に関する課題 ・地下遺構・遺物の保存環境を一定に保ち、かつ安易に掘削等できないよう、盛土を十分確保する必要がある。 ・史跡の景観に影響の少ない箇所への、電柱の移設が望まれる。 ●指定地の地形造成に関する課題 ・舌状地形の検討成果を、地形造成に反映できる方法を検討する。 ・歩きやすさに配慮して見学範囲を平滑に整えること、また周辺への影響を抑えつつ速やかに雨水排水が行われるよう地形造成を検討する。 ●指定地の保存管理に関する課題 ・故意はない場合でも、見学者がき損を与える状況は避けなくてはならず、立ち入り範囲の設定等、見学方法を検討する必要がある。

検討課題2 / 再葬墓の風習や往時の空間を体感するための、遺構表現の組合せや解説展示の工夫

泉坂下遺跡は、遺構・遺物が良好に保存されており、将来的な再調査や調査研究の継続という観点から、環境を大きく変えない整備が求められている。泉坂下遺跡で明らかになった弥生時代の再葬墓群やその他の時代の遺構に対し立体的な復元等は極力行わず、埋葬遺構（再葬墓と土坑）の表現と遺物（人面付壺形土器等）の展示を組み合わせる際に、AR等の映像展示を組み合わせるなど、必要最小限で効果的な方法を検討する必要がある。

また、遺跡という「点」とどまらず、久慈川からの肥沃な台地に人が定住し暮らしてきた歴史の流れや、空間的な広がりを感じられる場所にあることから、現在の暮らしと関連づけた紹介ができると、わかりやすさにつながると考えられる。

なお、既往調査の成果は報告書や測量記録があるが、整備において不足している情報や再調査を要する場合は、調査事業も推進する必要がある。

現状・既往計画・地域要望	整備の課題
●遺跡の特徴の表現に関する現状・方向性 ・総合説明板だけでは、見学者に対し価値の伝達（弥生時代の再葬墓の意味、埋葬者の集落構成など）が不十分である。 ・主要遺構はすべて地下に埋蔵されており、見学できない状況にある。また、保存の観点から遺構確認は最小限にとどめているが、主要遺構は3次元測量などの記録を行っている。 ・保存活用計画において、「弥生時代の集落や再葬、人々の暮らし等を体感できるよう、タブレット端末等を利用した遺構のAR復元表示等を検討する。」と方針を示してある。 ●史跡をとりまく周辺環境 ・史跡から久慈川沖積地に広がる水田や自然堤防上に形成された集落のほか、対岸の山並みまで見渡せる。史跡をとりまく周辺環境が良好に保全されている。 ●調査に関する現状 ・再葬墓としての未解明な点に関して、継続的な調査研究を行う方針である。	●遺跡の特徴の表現に関する課題 ・泉坂下遺跡の「再葬墓とは何か」を伝えるには、現在の家族や地域コミュニティと関連づけるなど、わかりやすい説明が重要である。 ・各遺構の性格付け、時期変遷、群としてのまとまり等の特徴にあわせて表現対象の遺構を選択するとともに、適切な整備手法の組合せを検討する。 ・集落構成のあり方や、墓制のプロセス紹介に関し、AR映像は有効な手段と考えられ、最新の研究成果に基づく復元検討が必要である。 ●視点場の設定・誘導 ・農村景観は、この土地の暮らしに思いを馳せることのできる魅力ある風景であり、再葬墓と一体で俯瞰できる位置を選んで、視点場を設定する必要がある。 ●整備に向けた再葬墓研究の継続 ・遺跡の特徴を伝えるために必要な調査研究については、整備事業に先立ち計画的に取り組む必要がある。

**検討課題3 / 公開・見学しやすい環境づくり
(アクセスルートの設定と計画地全体のゾーニング)**

アクセスルートの設定と計画地全体のゾーニングは、史跡公園への円滑な誘導、効果的な空間利用や体感演出、歩きやすさの配慮などが求められる。史跡とその周辺部の立地・地形、土地の利用状況、発掘調査成果等を参照しながら設定し、駐車場配置や誘導表示の設置などを検討する。

【その1】 泉坂下遺跡へのアクセス改善と駐車場の確保、周辺文化財や楽しく散策できる仕掛けづくり

泉坂下遺跡へのアクセス道路は、対向車のすれ違いが出来ない狭い道である。専用駐車場は無く、公共交通利用は不便であり、誘導標識も不十分であるため遠隔から訪問するのは難しい状況である。駐車場と道路拡幅は必要であるが、その実現には一定の時間がかかることが予想される。このため、岩崎用水沿いの文化財を巡る散策マップを使って、風景を楽しみながら文化財を周遊するなど、徒歩によるアクセス自体を楽しめる方策が必要と考えられる。

【その2】 史跡指定地外を含む計画地全体の利用計画（参照：図1-1 計画対象範囲図）

史跡公園の整備範囲は、市有地の史跡指定地（A：史跡ゾーン）とD：活用ゾーンである。Bゾーン・Cゾーンは埋蔵文化財包蔵地であり環境保全の範囲と位置付けている。Dゾーンの活用方針は未設定であること、遺構が集中する史跡北側と比べて南側は少ないことなどを勘案して、計画地全体の効果的な使い方の検討が重要となる。

現状・既往計画・地域要望	整備の課題
●泉坂下遺跡へのアクセス (車・バス利用) ・史跡に隣接する道路は幅員が狭く、車やバスの通行に適していない。道の途中に駐車する車や、水路に気づかず脱輪する車がみられ、地域住民の通行に支障を来す場合がある。 ・泉コミュニティセンターの駐車場利用については、十分周知されていない。 (公共交通・泉コミュニティセンター利用) ・常陸大宮駅からバス路線(市内循環右回り)が運行している。最寄の停留所は、国道118号近くの根本入口である。 ・泉コミュニティセンターからの徒歩ルートには要所に誘導表示を設置しているが、史跡の入口までの距離が長く、根本地区の集落を通過するため、遠回りでわかりにくい。 ●指定地外(Cゾーン/Dゾーン)の現状 ・泉坂下遺跡は浸水想定範囲に所在し、C・Dゾーンは埋蔵文化財包蔵地でもある。文化財収蔵施設の設置は適切とはいえず、環境保全を前提とした利用に限定される。 ・Dゾーンは公有地で、東側の市道からは奥まった位置にある。活用方法は具体的に定めていない。 ●周辺部からの眺望 ・泉坂下遺跡の全体を把握するには、地域住民が管理する農業用水である岩崎用水の管理用通路から見下ろすと分かりやすい。 ●周辺文化財との連携 ・岩崎用水に沿って、各時代の文化財が存在しており、周辺散策マップを作成している。	●交通・アクセスに関する課題 (駐車場用地の確保) ・道路拡幅を行う際は、長い距離に渡って景観に影響を与える恐れがあるため、目立たない工夫が必要となる。また、沿道所有者との調整に長期的な検討が必要となる。 ・車利用(学校教育、団体利用)を想定し、コミュニティセンターの他にも、近隣に駐車場用地を確保する必要がある。 (徒歩利用のわかりやすさの改善) ・車以外の来訪者を想定して、常陸大宮駅での情報提供や、国道・バス停留所からの誘導案内を検討する。 ・公園の入口は、市道に接する東側に限定することなく、徒歩利用者の利便性を高めることが求められる。 ●指定地外の活用策の検討 ・日常的な公園利用や災害時対応(防災訓練や高所避難)などに関する、地域要望を把握する必要がある。 ・史跡公園として利用者の案内・休憩・便所等の施設は、最小限にとどめる必要がある。 ●視点場からの視界の確保 ・岩崎用水の管理用通路を視点場として活用することについては、視界を妨げる樹木の剪定管理など、地域住民の理解と協力を得て行う必要がある。 ●散策しやすい環境づくり ・史跡案内のわかりやすさだけでなく、周辺散策や徒歩によるアクセスが楽しく感じられる環境づくりを検討する必要がある。

検討課題4 / 市民に親しまれ、「郷育」を実践する場としての泉坂下遺跡の活用

平成18年の再葬墓発見から、平成29年の史跡指定に至るまで、市民に向けて出前講座や発掘調査見学会を行った。保存活用計画においては、「幅広い世代が楽しく学べる場」、「再葬墓という当時の風習や世界観を体感する場」、「最新の調査成果の発信」など、史跡の活用に関しては多面的な方向性を示している。

具体的な活用策は多種多様に考えられるが、いずれにしても「泉坂下遺跡の魅力や価値を発信するソフト事業を通じて、過去から学ぶ「人づくり」(郷育)に役立てる」ことが重要であり、教育関係者や地域住民等と意見交換しながら継続できる活動が求められる。

現状・既往計画・地域要望	整備の課題
●活用事業 ・泉坂下遺跡の理解や周知にむけて、様々な活用事業に取り組んできたが、指定地での活用事業は進んでいない。 ・泉坂下遺跡は常陸大宮市の中心部に近く、イベント開催や、文化財周遊の起点としての活用が期待される。 ・学校教育における泉坂下遺跡の利用機会は少ないが、地域学習のテーマとして小学生を対象にした学習機会の提供は重要である。 ・史跡の維持管理や活用事業の運営は、「泉坂下遺跡をまもる会」と連携して取り組んでいる。 ●文化財展示施設 ・重要文化財の保存に適した施設が無いことから、保存活用計画において、「整備予定の文化財展示施設を拠点施設とする」方針を定めている。	●活用事業 ・遺跡の周知を図り認識を高めるために、未整備の段階から可能な事業に取り組む必要がある。(泉坂下遺跡に学ぶ陶芸講座、自然観察会など) ・イベント等により多くの人が集まることのできる広場としての役割が求められる。(文化財を見る歩く会など) ・学校教育のカリキュラムと連携しやすい環境整備(団体利用を想定した展示解説の充実、体験プログラム、便所や休憩施設など)。 ・「泉坂下遺跡をまもる会」ととどまらず、常陸大宮市と市民の協働による管理や運営の仕組みづくりが必要である。 ●文化財展示施設 ・泉坂下遺跡に関する展示及び情報発信施設は、当面は歴史民俗資料館がその機能を果たしつつ、新たな施設は長期的な検討が見込まれる。